Puzzzle文集　1

目次

cock-a-doodle-doo!! 1
六畳一間のハウスロッカー 4
ぼんおどり 5
くすぶりという名のぜんまい 6
小三 9
リップスティックエチケット 11
うどんを啜る娘 13
「おやすみ」と、言った、一〇時三〇分。布団に潜った僕はまだ眠らない。. . . 15
宍戸ヴィシャス 17
世界の真ん中に僕らは生まれた 19
宍戸シング・プライセス 23
とりかえしのつかない夜 26
そこなしぬまからビッグバン 28
宍戸デイドリーマー 31
落とし穴　落ちた 33
三輪バギーに鉄パイプ 36
宍戸ワッツ・アップ？ 40
オントロギー・ポップ 49
スーサイド・マシン 52
太陽の横顔 54

奥付
奥付 58

cock-a-doodle-doo!!

　時計の針は、だらり六時半を指している。布団を並べて眠る妻はまだ目を閉じたまま、籠の中では微かに小鳥の囀りが聞こえていた。

　目覚まし時計が朝を告げるまであと三〇分。隣に眠る健やかな寝顔もあと三〇分。三〇分が経てば、寝ぼけ眼の君が私の肩を揺すり一日が始まる。

　雨戸の隙間から僅かな光が差し込み、私は薄暗い部屋の中で天井の木目を眺めている。細かな年輪に囲まれた節はバックベアードの目のようで、ジッと見つめていると眩暈がしてくる。私のその目に促されるようにして、目覚まし時計を解除した。

　妻に気づかれないようにそっと蒲団を抜け出すと、ブランケットで遮蔽された籠の中で小鳥が羽音をたてた。私は口元に人差し指を立てて、寝室を後にした。いつもならばスーツに袖を通すところであるが、デニムパンツにダッフルコートを羽織って、家を出た。

　立ち並ぶ住宅の間をすり抜けて、大通りに出ると、すでに多くの人たちが行き交っていた。車を運転する人、バスを待つ人、駅へ向かって歩く人。様々な人が様々な方向へ進んでいた。そして、それを傍観する私を含め、誰もが着実に、一方向の時間軸にそって流されていく。

　ポケットの中に百円玉と十円玉を見つけ、自動販売機で缶コーヒーを手に入れた。無表情を繕って、町の様子を眺めていると、一人の少年が私の視界に飛び込んできた。両肩に掛けたギターのソフトケースを垂直に持ち上げ、金属のアクセサリーをふんだんにちりばめた、金髪の若者。ライヴ後に夜通し騒いで、朝帰りといったところか。

「朝の光って超ウザイ」なんて、言い出しそうな不機嫌な横顔だ。

　私の生まれた一九七七年はセックスピストルズが、クラッシュが、ダムドが、トーキングヘッズが、テレビジョンが、エルビスコステロが、その他、多くのパンクスがデビューし、アンダーグラウンドシーンであったはずのパンクロックが、大衆化した年だ。

　だから私はパンクの申し子なのさ。

　なんてモンでもないけれど。私がロックンロールの虜になったのは、その二〇年以上も後のことで、バンドを始めたときには彼らはすでに伝説化されていた。当時のパンクを特集する記事は、いまだに多い。しかし、いい中年になった彼らに当時を振り返らせる企画は、あまり見栄えのいいものではない。一時の衝動だから輝くのであって、特にパンクのアイコン的存在であるセックスピストルズが、一九九六年以降、再結成を繰り返しているのには、正直閉口させられる。

「パンクはスタイルじゃない。アティチュードだ」などと言っていたのは、ジョーストラ

マーだったかな。パンクのもたらした文化は、今でも多くの若者を虜にしているけれど、結局、一つのスタイルとして定着してしまい、私の視界を通り過ぎたあの少年が、世界を揺るがすとは到底思えない。

「今の自由は俺達が勝ち取ったモノだろう」

歳をとったジョンライドンは言っていた。あの言葉はあながち間違いではない。しかし、この日々の物足りなさも、先駆者達がもたらしたものなのだ。

何をしたって二番煎じなのだから。

一通り物思いに耽ったところで、私は河原に向かって歩き出した。河原までの道のりは、民家や小さな畑や商店が並ぶ退屈な道のりだ。煙草でも吸えばこの道のりを何とかやり過ごせそうだが、私は吸わない。学生時分に何度か試したけれど、咳が出るだけで、その快楽を享受することはなかった。憧れのようなものもあったけれど、薄っぺらな思いのために努力することが、私にとってはとても格好悪いことのように思えたのだ。そんな言い訳がましい理由で、煙草は吸わない。

缶コーヒーを飲み終え、行き場の無くなった両手をコートのポケットに突っ込んだ。

冷たい空気の中で、無表情を繕うことに息苦しくなってきた頃、ようやく河原の土手にたどり着いた。

この町で暮らすことを決めた理由の一つは、川に近いということだった。その割には、河原に足を運んだことなど数えるほどしかない。それでも、生活の中には、やはり河原に足を運んでしまうシチュエーションというものがあって、それがちょうどこの時なのだ。

だんだんと昇っていく太陽に照らされる川面は、まだ眠たそうに瞬いている。川の流れに身をまかせ、川の流れのように、そんなスタイルが昔から日本人は好きだ。でも、きっと、日本人だけではない。川を題材にした歌など、世界には無数に存在しているのだろう。この世で絶対的なものとは、秒速およそ三〇万キロメートルという光の速度だけであり、時間も空間もその相対として存在しているということらしいが、この緩やかな川の流れを眺めていると、これこそが絶対的なもののように思えてくる。だからこそ、ヒトは川を求め、川を歌うのだろう。

小難しい顔して、川に向かって眉間にしわを寄せていたところ、突如現れた人影に見事に驚かされた。土手に上ってきたのはさっきのパンク少年だった。

「あ」

私は思わず声をあげた。少年かと思っていたその若者が、実は少女だったからだ。目にはブルーのカラーコンタクトレンズを入れていて、透き通るような金髪と、その白い肌から、北欧系の神秘的な雰囲気がただよっていた。

「きれいだね」

なんて言えるはずもない。きれいなものを目にしても、きれいだと口にすることなど、最近では、滅多に無い。対象がヒトとなればなおさらだ。でも、それができれば、もう少し鮮やかな生活が送れるような気がする。

随分と長い時間、彼女に見とれてしまっていたようだ。彼女はすれ違いざま、眉間にしわを寄せた。

「何この人、きもい」
　そんな彼女の表情が痛い。
　朝の河原には、早くから犬を連れて散歩する人や、等間隔に並ぶ釣り人の姿が見受けられる。ここでは絶対的な川の流れに合わせた、ゆったりとした時間が流れていた。
　しかし、私が求めているのは、河原のゆったりした時間でも、大通りのせわしない時間でもなかい。この辺では一番遠くまでが見渡せるこの土手の上から、単調な日々を抜け出す糸口を探している。
もし、彼女に声をかけていたなら。
　不意に、静寂をかき消す金属音が響き渡り、顔を上げた。鉄橋を渡る列車が、軽快なリズムを刻んでいた。
　私の生まれ故郷にも、同じように川を横切る鉄橋がかかっていた。まだ小学生の頃、夏休みの宿題として、その鉄橋を通り過ぎる、オレンジ色の列車を写生しようとしたことがあった。子どもながらにも、動いている列車を描くことが困難だと判断し、カメラを持って河原に出向いた。写真を撮ってから、それを絵にしようと考えたのだ。
　結局、その写真は絵にならなかった。私は画用紙一面に河原の芝生だけを描いたのだ。その際、緑色だけは使わないようにした。完成したその絵は、担任の先生から「いつまでも見ていたい絵です」などと、絵としては一〇〇点満点のコメントを頂いた。
　それはとても作為的な絵だった。決して私の感性が優れていたわけではないのだ。そもそも、私は絵がうまく描けなかった。はじめに写真に収めようと考えたのもそのためだ。それでも、鉄橋を渡る列車を上手に描く技術は無かった。人より秀でたことをするためには、人のしないことをするしかない。そのことを幼いながらに知っていたのだ。そして、どんなことをすると大人が喜ぶのかも知っていた。
　先生の評価は手放しで喜べなかったけど、罪悪感もなかった。嘘つきでもいい。だって、人を感動させることをやってのけたのだからね。
　本気でバンドに目覚めたのは随分遅かった。なにせ、もう大学３年生になった頃だ。満足に演れるようになった時にはもう大学生活も終わりの頃だった。私たちは、好んでセックスピストルズやラモーンズ何かを演奏した。それしかできなかったというのも、ひとつの大きな理由だ。演奏したと言い切れるものでもない。
　私はとにかく大声張り上げ、ギターの弦がブチ切れるまで引っ掻いた。メンバーは三人。それ以上はいらねえ。俺達最高！
　しかし、結局、ライブハウスに立つこともなく、卒業とともに解散。
　だんだん遠くなるパンク少女の背中を見送り、そんな昔話を断片的に思い出した。
　私はいつでもギターを抱えている。
「ロッケンロー！」
　自分で驚いた。
　その声は、向こう岸の釣り人も顔を上げるほど響き渡った。一瞬の沈黙の後、急にこみ上げてくる恥ずかしさをかき消すように、パンク少女に背中を向けて駆けだした。
　彼女は不機嫌な顔で振り向いただろうか。それとも、朝一番のニワトリ程度にしか聞こえなかっただろうか。

六畳一間のハウスロッカー

　弾けないギターのネックを握り、ツルコケモモに吠えてみる。
　うらぁぁぁぁぁぁ！
　小さな赤い実がちょっと揺れた。いいんでないの。今日は、なんだかいけそうだ。ギターをスタンドに戻し、油にまみれユニフォームを詰め込んだバックパックを背負って、家を出た。
「一、二、三、」
　アパートの階段を駆け下り、自転車のスタンドを蹴り上げる。
「一五、一六、一七、」
　前かごにバックパックを突っ込んで、サドルにまたがった。
「二〇秒ルール！」
　長時間地面に触れていると死んでしまうのだルール。
　ペダルを踏み込むと、車輪がキコキコ音を立てる。服にまみれた油を塗り込んでやりたいと毎度思う。自転車がスピードに乗ると、キコキコが正確なリズムを生み、脳味噌の中でオリジナルナンバーが流れ出す。

　♪俺は下町少年 未だ大きな夢は見ないけんど
　廃工場の天辺で 見渡せる限りが 今僕の世界
　昨日川原の土手で君を泣かせて 僕も家で泣いた
　だけど下町少年いつか大きな夢が見れるから♪

　六畳一間のハウスロッカー。スリーコードが循環するこのナンバーは、まだ誰も聞いたことがない。
加速して、加速して、キコキコがコキコキになったところで、急ブレーキ。ゴムタイヤが地面を削り、ブレーキの悲鳴が夜空に響いた。
「ガソリン満タン！」
「馬鹿言ってないで、早く、支度しろ」
　そりゃ、ないんでないの。
　弛んだ皮膚まで油がしみこんでいるおっさんに顔を背け、斜向かいのファミレスに目を向けた。ミニスカートの彼女は、今日もこっちに尻を向けてテーブルを磨いている。
　ガスボーイとウエイトレスの恋なら上手くいくだって？ そんな馬鹿なこと言ってるから、旦那に自殺されるんだよ。あの子はこっちに気づきもしない。センスも将来も感じ

させない小汚いおっさんと、無意味な会話を繰り返して、朝までやり過ごすのが関の山だ。
「おっさん、俺、一抜けた」
「馬鹿言ってないで、早くしろ」
　オリオンに向かって、俺は吠えてみる。
　うらぁぁぁぁぁぁ！
　三ツ星がちょっと揺れた。
「早くしろ」

ぼんおどり

　疲れた。ひどく疲れた。腹が減り、喉が渇き、唾液も固まった。嗚呼、それはそれはもうひどいひどい有様だ。汗と熱に塗れた体を地下鉄のシートに沈め、両足を投げ出し、頭を垂れる。俺は、今、乗客マナー最低位に位置する。
　誰かが俺の足につまずいた。そして、声を荒らげている。嗚呼、五月蠅い。俺はレールを削る金属音に聴覚を集中させ、罵声をシャットアウトする。すると、硬質の鋭い感触が脳天を打った。
「たっ！」
　脳天が開栓されシャンパンが吹き上がる。貧相な想像力とともに顔を上げると、小人のような爺さんが杖を振り上げて、何やら喚き散らしていた。
「○ Œ ☆●スペペペペっ！」
　おいおい、通訳はおらんのか。辺りを見回せば、誰もが目を反らせていた。唯一、俺に視線を向けていたのは指をくわえた餓鬼だった。でっぷりとした体を揺らしながら、じっとこちらを見つめている。肉に埋もれたつぶらな瞳は実際のところ何が写っているのか定かでない。首は定位置のまま固定され、関節が機能しなくなっているようにも見える。
「醜い餓鬼だな」と、俺は呟いた。
　隣の母親であろう女は、携帯電話の操作に余念がない。餓鬼に爺さんの通訳を頼むわけもいかず、俺は途方に暮れた。ここが異国ならば、言葉の通じぬ相手には、ひとまず笑顔の一つも浮かべればいいだろうが、あの形相から察するに、笑顔を浮かべたところで火に油だ。
　爺さんの目的はおそらくこの座席であろうと察せられる。プライオリティー・シートと記された三人掛けの特別席。そのド真ん中で足を広げて占領している俺が気に入らな

いのだろう。しかし、どうだ爺さん。この俺とあんたとで、どちらのプライオリティーが高いと思う？

俺は、たった今、世界を救ってきたところなのだ。申し訳ないが詳細を語ることはできない。何故なら最高機密だからね。というわけで、俺と爺さんではどう考えてもヒトとしてのプライオリティーが雲泥なわけよ。そして、俺はひどく疲れている。何故って、繰り返すようだが、実際、繰り返すのであるが、俺は、たった今、世界を救ってきたところなのだ。残念ながら、この席を爺さんに譲る理由はない。

とはいえ、脳天をかち割られ、「○ Œ ☆●スペペペペっ！」などと喚かれ、それでもジッと座っているのもどうだろう。真っ先に浮かんできたのは、延髄辺りに手刀を振り下ろして、永遠に黙らせてしまうという手段であった。しかし、こんなところで面倒を起こすわけにもかない。なぜならなぜなら、最高機密の世界救済を終えたばかりなのだから。

嗚呼、俺は残りの人生を、話したくとも話せない最高機密に縛られながら生きていかなくてはならないのか。いっそのこと、誰も寄せ付けぬほどの猟奇じみた踊りをしながら、アヴァンギャルドに余生を送るほうがいいのかもしれない。我ながらナイっスな思いつきだ。

「スペペペペっ！」

俺は、突如、爺さんに共鳴するように、喉を振るわせた。そして、貧弱な両肩を掴んで立ち上がる。俺は二メートルを超える巨漢なのだ。小人の爺さんなど軽々持ち上げることができる。そのまま回れ右の動作で旋回し、爺さんをプライオリティー・シートに沈めた。

爺さんは呆気にとられ、阿呆面で俺を見上げた。なかなかナイっスな表情だ。その表情が絶えないよう、俺は追い打ちをかけた。斜め四十五度に天を臨んでは、奇妙に立ちつくし、視線の先にひょいと両手を突き出した。続いて、顎を引いて首をぐるりと旋回し、反対の天を臨む。そして、やはりひょいと両手を突き出した。そいつを左右交互に繰り返し、いつまでも反復運動を続けた。爺さんへのプライベヴェートダンスだ。

爺さんを発狂寸前まで追い込んだところで、列車が駅に滑り込む。そこで、俺は旋回し、なおも反復運動を繰り返しながら、ホームへ下りていった。

今日は大晦日だ。

くすぶりという名のぜんまい

美津濃は定期的にイライラしている。女みたいなヤツだ。

月一の定期ライヴが近づくとそうなのだ。ローリングソバットという名のお笑いコン

ビを組んでおり、気が弱いわりに、担当はツッコミである。
　一枚六〇〇円のチケットを売りつけられ、何度かライヴには足を運んでいる。典型的な笑いが、典型的な笑いを誘い、典型的な笑い声が響きわたる。そんな典型的なお笑いライヴだ。素人ながらも、ある程度の固定ファンを抱えており、場の雰囲気も悪くない。
　それにしても、お笑いライヴは、音楽に比べると非常にチケット代が安い。舞台に上がる側も、たいして金を積む必要が無いようだ。一〇組くらいが五分程度の舞台をこなすイベントになるのだから、一組あたりの金額は高が知れているだろう。
　そんなお手頃感がありがたい反面、見るものに苦痛を伴うことがある。値段と質は比例するのだ。見なきゃいいじゃんと言われれば、それまでであるが、一人の持ち時間は五分程度である。ローリングソバットを見に来たといっても、その五分のために六〇〇円を払うのは、少々勿体ない。そんな貧乏根性で、つい最後まで見てしまうものだから、多くの場合、首筋に妙な脂汗が浮かび、そして、ライヴが終わる頃には、魂が抜かれて、廃人寸前にまで追い込まれている。舞台上の皆様が、手抜きなどという高度なテクニックを駆使している訳ではない。それでいて、俺達サイコーという輩ばかりだから閉口させられる。
　一度だけ、打ち上げに参加したことがある。美津濃の友人ということで、ファンの女の子に随分とちやほやされ、悪い気はしなかった。酒が入ると良く口が回る。ただそれだけなのに、「面白〜い」などと言われれば、そこいらの自称サイコー芸人よりも、俺のほうが格段にキレると勘違いさせられた。
そして、それは、まだ暑い季節のころ、俺はマモルヤマモリと名乗り、初舞台を踏むことになった。
「ＨＥＹ、ＹＯ、チェケラッチョ、メーン」
　ヒップホップ調のＢＧＭを受けて、訳の分からない奇声を発しながら舞台袖から現れた。そして、中央に置かれたデスクに座り、ラジオのＤＪ風にヘッドホンをつけた。
「さて、今週もはじまりました。マモルヤマモリの今夜もトゥナイト」
　ウインク一つでサイドスローに客席を指さすと、俺の顔から血の気が引いた。
　絶対に笑いません。
　そんなオーラが客席から押し寄せてくる。ハコの中は常連芸人と観客の連携から成り立っている。新顔の初舞台は、若奥様の公園デビューに近いのだ。
　念のため用意しておいたサングラスを、ポケットから取り出した。そして、気を取り直し、デスクの上から一枚の紙を拾いあげた。
「えぇ、最初のお便りです。ペンネーム山本博司」
　ペンネームじゃないよ。
「最近、新宿で気になる木星人カップルがいるんです」
　気になるよ。
「彼女が木星語で言うんです」
　分かるのかよ。
「新宿ってガス臭いわよね」
　木星程じゃないよ。
　心の中で己にツッコミを入れる。想定していた四回の爆笑は、一度たりとも起こらな

かった。俺は気が遠くなり、サングラスの陰で目を閉じていた。
「リクエスト曲は、オジー・オズボーンとランディ・ローズで、『ふたりの愛ランド』をお願いします」
　理解されないだろうと諦めてた最後のオチで、ようやく一人の馬鹿そうな男の笑い声が聞こえた。顔面蒼白。あと二センチ鼻が高ければ、駅前留学の英会話講師ができただろう。全部で五通のお便りを用意していたが、
「ここで一旦ＣＭ」
　と、言い残し、二分で退場。芸人としての初舞台はみごとに撃沈された。
　舞台袖で、美津濃が、項垂れた俺の肩を叩いた。
「やるなぁ。初めてとは思えないよ。結構面白かった」
　ウケの悪さが面白かったのだろう。俺は無言でその場をやり過ごし、舞台裏を通り抜けた。用もないのに便所に入り、便座に腰を下ろした。ベニヤ板の薄いドアの向こうから、調子のいいやりとりと笑い声が響く。
「どぅもぉ、ローリングソバットですぅ」
「最近ねぇ、僕、ペット飼い始めたんですよ」
「へぇ、何を飼っているんですか？」
「シャコ」
　俺は笑いをこらえてむせ返った。ちょっと面白れぇじゃねぇかよ。
「シャコって、寿司ネタじゃないですか」
「いやいや。そんな高級なもんじゃなくて、ウチのなんかは雑種ですよ。ハハハ」
　ハハハ、美津濃の作り笑いと俺の空笑いが重なった。ハハハ、惨めだ。ハハハ、舐めんな。ハハハ、ざけんな。俺はレバーをひねって便所から抜け出した。舞台袖では、一方は学ランに水泳帽、もう一方は上半身裸の黒タイツがスタンバイしている。ハハハ、舐めんな。ハハハ、ざけんな。こんな低能な奴らと一緒にすんな。
「辞めさせてもらうわ」
　何故か最後だけ関西弁で締めくくり、満足顔のローリングソバットが小走りに帰ってきた。
「おっし、行こか」
　水泳帽と黒タイツが入れ替わりに飛び出していく。
「やんのか、このヤロォォォゥ！」
　二人の叫び声に、男のファンたちが黒い歓声で応える。俺は愕然とした。フラフラとハコの外に出て、繁華街の臭い夜風にあたる。背後から晴れやかな美津濃の声がかけられた。
「まぁ、俺らには馴染みの客がいるからな。結局、顔馴染みになるまで、心を開いてくれない訳よ。初対面のヤツの話に大口開けて笑わんだろ、フツウ」
　なまぬるい空気。繁華街のネオン。生ゴミの臭い。雑踏。そんな情景にぴったりな、精一杯の強がりがこぼれ落ちた。
「まぁ、なんつうか、こんなとこかってのが分かったよ」
「こんなとこだよ。打ち上げ行くよな。初舞台だろ」
「わりぃ、ちょっとパスだ」

俺は美津濃に目も合わせず、夜の繁華街を歩きだした。
笑いをとれるヤツ。いかしたバイクにまたがっているヤツ。気の利いたシルバーアクセサリーをつけているヤツ。いかれたタトゥー。女連れの腑抜け。携帯を握るスーツ姿。俺を横切る全てが格好良く見えた。惨めだ。俺は格好良くなりてえんだ。単純にそうだ。阿呆みたいか。悪いか。でも、それが俺の理想なんだ。
俺はまだゼンマイを巻き続けている。解き放つ機会を探りながら、くすぶりという名のゼンマイを巻き続けている。

小三

昼休みの回旋塔で、俺が飛び上がり、ミツヤが飛び上がり、昼休みの時間を刻んでいた。
「モトコさんだったよな？ やっぱ、付き合ったりとかするんだろ？」
あいつはまだ興奮気味だった。昨日、近所の女子大生に惚れていることを白状したのだ。
「阿呆か。知らないよ。それに、別にモトコさんは、」
ミツヤはいつも気楽そうに見えてうらやましい。運動音痴だったり、性格が暗かったり、俺はいつもたくさんのコンプレックスを抱えている。そんな俺をモトコさんが好きになる訳ないだろう。いつもの笑顔だって、別に俺にだけ見せるものじゃないんだ。
溜息を一つ、すると、急に目の前のミツヤが一回り大きな振り子にすり替わり、俺の体が空高く伸び上がった。
しまった。五年のテツヤさんだ。
見下ろせば、地面に尻餅をついたミツヤが、眉を情けなく垂らしてこちらを見ている。そして、テツヤさんは俺を宙吊りにし、悪意に満ちた満面の笑みを浮かべていた。一方の手を、回旋塔の傘の縁に、そして、もう一方を柱に掛けた。
「必殺、ＵＦＯ回し！」
俺はすぐに手を離して、ここから脱出すべきだった。しかし、足元を見下ろすと、すでに地面が随分と遠い。躊躇しているうちに、体が浮きあがっていた。テツヤさんが柱を軸に回旋塔を回し始めたのだ。
「お、おい、やめろ」
「やめてくださいと言え」
どんどん加速して、両足が頭と平行になるまで持ち上がる。やばい、下手に手を離せば隣のジャングルジムに激突だ。テツヤさんの笑い声が響く。ヤメテクダサイ。声を出

そうにも、口を開けるとたちまち言葉が風に飛ばされる。自然と涙があふれ出た。
　また傷だらけになって帰るのか。また言い訳を考えなきゃならないのか。吹き飛ばされる恐怖より、テツヤさんに対する怒りより、そんなことばかりが頭を過ぎる。
　今日はモトコさんと顔を合わせたくないな。
　俺は両手を滑らせ、体が空中に放り出された。皆が俺を見上げている。中には笑っている奴もいる。顔をクシャクシャにしているのはミツヤか。あいつ、根っからいい奴なんだよな。時間がゆっくり回る。そんなことってあるんだな。どうやら、うまくジャングルジムは避けられたみたい。フワリと着地できそうな気がする。
　足が地面に接した瞬間、時間が急に速回しになった。俺はそのまま後ろに一回転。肩に、頭に、両膝に、立て続けに痛みが走った。そして、うつ伏せのまま、砂利の校庭を滑り、やがて止まった。跳ね上がった砂利がパラパラと降り注がれ、遠くでテツヤさんの高笑いが響いた。
　しばらくうつ伏したまま、歯を食いしばっていると、周囲をたくさんのヒトの気配が取り囲んだ。みんな俺の情けない顔が見たいのだろう。痛いか？ そうでもない。悔しいか？ そうでもないんだ。とにかく、どっかに行ってくれ。早くしないと、先生が来ちゃうだろ。その前にみんな消えてくれよ。頼むから。
　僅かに顔を上げると、人垣に一人分の隙間が見えた。みんなが消えない気ならば、俺が消えるだけだ。とっさに両手をついて、地面を蹴った。でも、だめだった。踏み込んだ左足の膝が思いのほか痛くて、またすぐに倒れこんでしまった。人垣がざわめき、俺と一緒にちょっとだけ前進した。
「おい、どうした？」
　この声はウエシバ先生。よりによって担任だ。人垣が割れて、先生の入り口が開いた。

「なにがあった？」
　先生は俺の肩に手をまわして抱き起こす。火照った顔を隠すように俺は前髪を垂らした。
「大丈夫です」と、言いかけた寸前、甲高い声が響いた。
「五年生の猪口テツヤですぅ」
　俺は舌打ちした。この声はクラスで一番の出しゃばり女子だ。これじゃ、まるでいじめられっ子じゃないか。俺はますます顔を赤くした。
「ちょっとふざけてただけですよ。へへへ、またやっちゃった」
　俺は声を振りしぼって、おどけてみせた。
「本当か？」
　先生の声が耳元で響く。続いてミツヤの声が近づいてきた。
「本当です。先生。ちょっとふざけてたんですよ」
　あいつは分かっている。認めたら負け。イジメなんてのはその時点で決まるんだ。俺はイジメられっ子なんかじゃない。
　先生のため息が吹きかかる。
「しょうがない奴だな。じゃぁミツヤ、こいつを保健室に連れてって」
　ミツヤは先生に呼ばれて、俺の腕を引き上げた。

「やられたな」
「へへ」
「女子ってサイアク。分かってないよな」
「マジ、分かってない」
　昼休み終了のチャイムが響く。このまま重症な振りをして、午後はベッドで過ごすとしよう。
　膝のすり傷から血がにじむ。実際はたいした怪我でもないんだ。それでも、俺はミツヤの肩に腕を回して、足を引きずってみたりする。
　俺は超人デスマッチで、極悪超人にやられた哀れなヒーロー。死の淵から這い上がった俺は、テツヤさんにハイパーキックをぶちかます。
　いつの日か、きっと。

リップスティックエチケット

　事務所を出ると、いきなり血達磨だ。
　血まみれの男が担架で運ばれていた。夜の街灯に照らされ、奇妙に黒光りしたそれは、間違いなく流血だった。車輪突きの担架の上で胡座をかいているものだから、血を浴びた大仏を思わせる。こんなに大量の血を流したニンゲンを目にするのははじめてだ。瞳孔が開き、血達磨と目が合った。
　発車のベルが鳴り響き、ホームへ階段を駆け下りた。どうにか飛び乗ると、後ろを追い駆けてきた女の手前でドアが閉まった。女は不機嫌な顔で、列車の最後尾に視線を送る。車掌に文句をつけたいようだが、残念ながら最後尾までには五両以上もある。列車はレールを滑り出し、女を残していった。
　俺は乗り遅れた女から視線を逸らさない。不憫に思うわけでも、いい気味だと笑うわけでもない。ただ、車内には、不憫だと思った奴、いい気味だと笑った奴が、いくらもいたのだろうと想像した。
この街は腐っている。各人は大して腐っていないにしても、そいつらが一つの街に集まれば、ひどい腐臭であふれる。血達磨の一人や二人、特別、珍しいものではない。こんな街では、できる限りのものを客観したい。
　視界から女が消え、列車は地下トンネルに潜り込んだ。レールを刻む金属音が乱舞し、すぐに聴覚は麻痺する。目を瞑って視覚も奪い、俺は指先に神経を集中させた。そして、スーツの内ポケットに手を差し入れた。きっと塗るだろうな。家に帰って鏡に向き合えば、こいつを唇に塗るだろうな。眺めるでも、匂いを嗅ぐでもなく、こいつは唇に塗り

つけるためのものなのだから。

列車を降りれば、今度は、ロータリーで男が倒れていたのだ。もうすぐ家に帰り着くというのに、勘弁して欲しい。先の男が大仏ならば、こちらは寝釈迦か。行き交う人々は、男に気付かぬ振りで通り過ぎていく。そして、俺も同じように通り過ぎようとしている。男は歩道に寝ころんで、足だけ車道に投げ出していた。自分で歩道の縁石に腰を下ろして、仰向けに寝そべっただけのようにも見える。だから、誰にも声もかけてもらえないのだ。なんて、男のせいにもしてみる。

俺は溜息をついて立ち止まった。今日はなるべくいい気分で家に帰りたいのだ。男を見下ろし、声をかけた。

「大丈夫ですか？」

男は痙攣したまま、眼球だけを動かして俺に向けた。緩慢な動きが、ますます面倒な気分にさせる。俺はもう一度溜息をついた。こんな輩は警察に任せるのが手っ取り早い。交番に目を向けると、俺より先に通報している女がいた。倒れた男の方を指さし、なにやら訴えている。俺は胸をなで下ろして、再び歩き出した。

一連の出来事は未来に対する暗示か。俺は眉間に皺を寄せて、小難しい顔で自問した。交差点で赤信号に捕まると、先ほどの通報した女が肩を並べ、自問は答えを得ぬまま中断した。

ミニスカートに豊満な胸を強調したタイトなシャツ、デニムのジャケットを羽織って、口元には真っ赤な口紅がべた塗りされている。明らかにまともな仕事をしていないことが伺い知れる。嫌悪感を抱く一方、多少の興味は否定できない。頭の弱そうな姿は安心感すら覚える。

バイクにまたがった二匹のオス猿が、奇声を発しながら俺の前を横切った。正確には、女の前を横切ったと言うべきだろう。信号が青に変わった。俺は女のケツを追い、卑猥な妄想を浮かべながら歩きだした。

家に着くと、スーツをハンガーに下げ、その内ポケットに手を差し入れた。体温で温まった硬質の感触。繊細で無駄のないフォルム。薬莢を思わせるのは、ルパン三世'80の影響だろう。峰不二子が、捻り出した口紅をピストルに詰め込んで発砲する、何度も見たオープニングだ。

俺はネクタイをむしり、前髪を鼻の下まで撫で付ける。そして、口紅を捻り出し、鼻先に近づけた。芳香を吸い上げると、紅を構成する各種ケミカルが鼻腔の奥、嗅細胞の受容体を刺激した。ほぼ無臭。しかし、強く吸い上げれば、どこか懐かしい香り。幼い時分、母親に強制された接吻の記憶か、それとも、親しんだクレヨンの匂いか。

オールドファッションに、国産のモルトウィスキーを注ぐ。そして、心臓をうねらせながら、鏡に映る女と目を合わせた。

「馬鹿ね」

鏡に映る女が呟いた。

本当に馬鹿だよ。鏡に映る女とは、口紅をさしたこの俺だ。

鮮血のように赤い口紅は、肉を喰いあさった獣を連想させる。何故、こんなものを塗りたくることが美とされるのか。嗚呼、美しくない。鏡に映る女は全く美しくない。どうしたことか、気分が全くのらない。涙さえ浮かんできた。

余計なことは考えず、無邪気でいたいのに。そんなときに限って、大仏や寝釈迦の顔が浮かびあがる。マスターベーションをしている時のそれのようだ。思い出したくない時に、思いだしたくない野郎の顔が浮かんでくる。消えろ消えろと念ずるほどに、そいつの顔が鮮明になってくる。

なんだか口紅が充血したペニスのように見えてきた。やめろ。

涙を乗り越えると、今度は、鏡に映る醜い女に憤りを感じはじめた。俺は口紅をいっぱいに捻り出し、そいつに噛み付いた。ガキの頃に口にした、茶色のクレヨンと同じ味がした。顎の筋肉を懸命に引き締めて、そいつを噛み切ると、唾液があふれた。間抜けな消化器官は、こんな異物をも取り込もうとするのか。俺はそれに応えるように、一心不乱に咀嚼した。赤い唾液が気管に流れ込み、鼻から吹き出した。涙も出た。視界が霞み、俺は天井を見上げた。

そして、喉を鳴らして全てを飲み込んだ。しかし、すぐに胃酸が逆流し、俺は台所に駆け込んだ。シンクが赤く、酢えた液で満ちた。

「シンクが深紅」

馬鹿らしくなり、こみ上げる笑いとともに、赤い唾液を噴霧した。

「シンクが深紅っ、シンクが深紅っ、シンクが深紅ぅ」

俺は連呼し、部屋の中でしばらく飛び跳ねた。

再び、鏡の女と目が合った。

「馬ぁぁぁ鹿」

真っ赤になった口元を手の甲で拭い、そのままこめかみ辺りまで撫でつける。鏡の女は酷く醜く、愛おしい姿になり、止めどなく涙があふれ出した。

うどんを啜る娘

うどんを啜る娘が好きだ。

そう気づいたのは暑い夏の日だった。次のアポイントまで時間の余裕があったため、デパート地下のフードコートに立ち寄った。メールのチェックをしつつ、小腹を満たそうと考えたのだ。ファーストフード店でアイスコーヒーとホットドッグを購入し、カウンター席に落ち着いた。

ＰＣが立ち上がるのを待ちながら辺りを見回すと、平日の昼間であったが、テーブルを囲む一組の家族がいた。父親は天ぷらうどんを頬張り、娘と母親はハンバーガーを囓っていた。ジャンクフードを子供に与える親に反感を覚えることがあるが、黙々を天ぷらうどんを食す父親とは対照的に、仲良のさそうな母娘の姿はとても健全な食事に見えた。

ホットドックを半分まで食べたところで、ようやくＰＣが立ち上がった。ケチャップの付いた指先を舐めて、通信カードを差し込む。続いて、社内イントラへアクセスするためのパスコードを入力し、最後にエンターキーを小気味よくタップした。

その時、カウンターの並びからうどんを啜る音が聞こえてきた。何気なく視線を運べば、どんぶりに向かうセーラー服姿があった。小柄で真っ直ぐなショートヘア。活発そうな風貌は、部活終わりに腹を空かせて立ち寄ったというような印象だ。しかし、まだ太陽の照りつけるこの時間、部活帰りというよりは、アルバイト前の腹ごなしといったところか。

うどんはいいなぁ。

妙な感想を抱いたのは、食事中の一家を目にしたからだろう。うどんを啜る父親がいて、ハンバーガーを囓る母娘がいて、そして、うどんを啜る女生徒の観察に至ったのだ。彼女は確かにそこに存在する。人間の感覚とは相対的なものなのだと、俺は実感した。

ブラウザを立ち上げ、新着メールを確認する。社内報に上司からの連絡。どうやら顧客からの注文はないようだ。社内報を読み飛ばし、上司からの連絡に鼻息で応える。バッテリーの消耗を気にして、すぐにネット接続を解除した。

次のアポイントは販売に直結する案件ではなかった。その上、何度も顔を合わせている馴染みの顧客だ。随分と気が抜けていたのだろう。でなければ、うどんを啜る娘など気に留めないだろう。なんて、彼女を観察する自分を正当化（？）してみる。

その横顔から、表情は伺えなかった。姿勢悪くどんぶりに顔を寄せているのは、恥じらいのためか、躾られていないためか。

自分自身が高校生の頃を思い返した。フードコートで一人、うどんを啜る勇気はあったろうか。自意識という強大な魔物に支配され、一人で外食することすら躊躇っていた覚えがある。かといって、ファーストフード店で仲間と華やかな時間を過ごした記憶もない。当時、俺とその周辺連中の間では、喫茶店でアメリカンコーヒーとジャーマンドックを召すことが粋だと信じられていた。そんな信仰を持つのは、つまり、暇を持て余した男子集団なわけだ。暑い夏の日であっても、むさ苦しく屯した。タバコ臭い店内で燻されながら、話題は飽きもせずロックンロールのことやら女子のことやら。前言撤回、正直、飽きていた。本当はもっと色んなことが「したい」のだ。それこそ、ロックンロールやら、女子とやら。それでも、一歩踏み出す術を知らず、日々燻されていった。嗚呼、群青色の青春。

そんな俺も、一人、陽の当たるフードコートで過ごすようになったわけだ。しかし、結局のところ暇つぶしだ。アイスコーヒーにホットドッグだ。溜息とともに苦笑いが浮かぶ。彼女に気づかれることが恥ずかしくなり、俺は残りのホットドッグを一気に口へ詰め込んだ。十分に咀嚼したところで、アイスコーヒーを流し込む。冷たい刺激が気管に入り、咳き込みそうになった。

俺は必死に堪えた。口を膨らませて、顔を真っ赤にして、タコのようなで形相で涙を滲ませた。二度と彼女に向けることが許されないであろう、醜い顔だ。

そして、俺は心に誓う。

次は、必ず、うどんだ。

誰よりクールな出で立ちで、うどんを啜るのだ。愛想の悪い親父のようにではなく、恥じらいと強かさを兼ね備えた娘のように、うどんを啜るのだ。
その時、俺の存在を証明する観察者は現れるだろうか。
次は、うどんだ。

「おやすみ」と、言った、一〇時三〇分。布団に潜った僕はまだ眠らない。

「おやすみ」と、言った、一〇時三〇分。布団に潜った僕はまだ眠らない。
暗闇を見つめながら、世界の平和を祈っている。本当なんだよ。宇宙人の存在だって信じているほうだから、祈るほうも大変さ。
でも、僕は臆病な天文学者。無限は怖い。ゼロも怖いよ。いつか地球は太陽に食べられてしまう。そうなった時、宇宙人がいなければ世界はゼロになる。命があって世界だろう。観測する者がいなければ、世界は存在しないだろう。
腹筋のあたりでゼロ虫が騒ぎ出した。また無限に広がるゼロを想像してしまったからだ。僕はお腹をさすりながらゼロ虫が静まるのをジッと待つ。大丈夫。もし、世界に誰もいなくなったなら、誰も知らぬ間に流れ去るんだ。そして、また僕のような臆病な少年が現れる。それまであっという間さ。
死んだらどうなるか。そんなの知らないよ。太陽に地球が飲み込まれた、もっと先の未来で、宇宙を眺めている少年が、この僕だと思いたいわけではないんだ。ただ、誰かいないと、無限の世界がゼロになる。それが僕には絶えられないんだよ。だから、僕は祈っている。世界に生命が絶えませんように。そう祈っている。
ところで、僕には素敵な友達がいる。
「ダイクマにチェーンソー売ってたよ」ジョーは言う。
「だからなんだよ」僕はこたえる。
「世界中のチェーンソーをぶっ壊したら、アマゾンの伐採は止まると思わないか？」
最近、ジョーは森林破壊の問題に五月蠅い。どうやらエヌエッチケーを見たらしい。
「無駄に命を奪う行為は、すぐにでも止めるべきだ。お前の言う、世界平和にも役立つだろう」
僕は小さく頷いた。ジョーは大きく頷いた。そして、「チェーンソー撲滅計画」を持ちかけてきたのだ。
「ダイクマのチェーンソーをぶっ壊したくらいで、世界は救えるのか？」
「可能性はある」

「あるか？」
「ある。俺たちの活動が世間に知れ渡り、世界的な活動になってみろ。いいか？ できることから始めなくては、何も止めることはできないんだ」
「今、俺たちって言ったな」
「そうだ。お前は世界平和を祈ってるんだろう。ならば、まず足元を見ろ。地球を救ってやらなくてはどうにもならん」
　ジョーは冗談を言っている素振りもなく、両腕を組んで真っ直ぐに僕を見ていた。
「ちょっと、くっちゃべってないで、はやく掃除しなさいよ」
　チヒロが分け入ってきた。クラスで最も五月蠅く、最もチビだ。陰ではチビロと呼んでいる。
「俺たちは、世界を救う手段を考えているんだよ」ジョーは言う。
「馬鹿言う前に、床のゴミを掃きなさいよ」チビロはこたえる。
「それも重要な一歩だ」
　僕とジョーは、それぞれ箒とちりとりを握らされ、掃除を開始した。
「いいか、決戦は土曜日だ」ジョーは僕に耳打ちした。
「策はあるのか？」
「もちろんだ」
　そして、決戦は明日だ。僕の枕元には、図工室から盗み出した一キログラム木工ボンドのポリ缶がある。ジョーの作戦とは、このボンドを、チェーンソーのエンジン部分に流し込んでいくというものだった。
　明日のことを考えているうちに、ゼロ虫はすっかり消えていた。ぽっこり膨れたお腹をさすっていると、自分がクマのプーのように思えた。でも、僕は、どちらかといえば、脳天気はクマより、思慮深いフクロウのほうだ。小難しい顔をしていて、何か考えている風に見せて、実は大したことは考えていない。思慮深い振りをするコデブだ。フクロウの本当のところを、僕は知らないけれど。
　はぁ
　ため息をついた。僕の問題は、無限の宇宙から、明日の決戦、そしてぽっこり膨れたお腹へ移っていく。ジョーと一緒にハンバーガーを食べてしまったんだ。思慮深い振りをするコデブがハンバーガーを囓る。その姿を思い返すと気分が悪くなる。腹の回りには贅肉が上乗せされて、またちょっと太った。一五五センチで五三キロは、もうデブの域だろう。無限の宇宙がゼロになる前に、アマゾンの破壊を食い止める前に、本当はこの醜いお腹をどうにかしたい。
　ジョーがアマゾン破壊の特番を見たのは、きっと、僕のためなんだ。でなきゃ、エヌエッチケーなんて見ないだろう。僕がこんなに臆病でなかったら、世界中に自慢してやりたい。
　僕には本当に素敵な友達がいるんだよ。

宍戸ヴィシャス

息子の冬着を購入し、フードコートで食事をしていると、携帯電話が震えた。ポケットから取り出した液晶画面を睨めば、宍戸からのメールだった。

なんかやりたいな

忘れていた感覚が呼び起こされた。随分昔によく口にした言葉だ。

学生時代、俺と宍戸は、太鼓の叩ける気のいい後輩を引き込んでバンドを組んだ。リズムがまともにとれる奴さえいれば、ろくに技術が無くても「なんかやりたい」が体現できる。パンクだと言えばいいのだ。何に対する不満はなくとも、衝動の体現こそがパンク。何もしなくたって、それなりに生きていけた日々。衝動の根底には不満もあったろう。それほど昔の話ではない。

バンド？

この歳じゃ今更って感じだよな

詩でも書けよ 俺はもう会社人間だお前は自由だろ

皮肉を言ったつもりはないが、それ以降、返信はなかった。中原中也の一節が過ぎる。

おれはおもちやで遊ぶぞ

おまへは月給で遊び給へだ

俺は、きっと宍戸のような生き方に憧れがあるのだ。

中也の存在を教えてくれたのも宍戸だった。大学卒業とともにバンドが弾けると、宍戸は詩人になった。一人で不満を解消するには、書くぐらいしかないのだという。あいつも同じ一節が浮かんだのではないだろうか。

メールを訂正したい気もするが、長い文章を打ち込むのが億劫だ。かといって、あいつに電話をかけるのは、なおさら億劫だ。

視線を落とせば、ベビーカーで幼子が眠っている。少し不機嫌そうなその表情を見て、俺はひどく不謹慎なことを呟いた。

「あいつ、早死にするだろうな」

続いて、気配にビクリと肩を震わせた。目の前の細君が割り箸をくわえて真っ直ぐに見ていたからだ。

「どうした？」

切れ長の目。北欧の少年のようでもある。その視線はゆっくり俺の手元に下りていった。俺はすぐにその意味を理解する。

「あ、食べる？」
　返事を待たずに食べかけの器を差し出すと、彼女は満足げな表情でそれを受け取った。

「宍戸君？」
「そう」
「なんだって？」
「なんかしたいって」
「言いそうだね」
「暇なんだろ」
　彼女は、それ以上、何も言い返すことなく、食いかけのカツ丼を頬張った。授乳中の母親は腹が減って仕方がないのだ。
　その夜、宍戸からの電話が鳴った。
「息子君は元気か？」
「名前くらい覚えろよ」
「お前に教えておくことがある」
「昼の続きか？」
「そうだ。いいか、自由ってのは、ある程度の拘束の中に存在するもんだ。俺みたいに年中無休で暇だと、朝一〇時に目を覚まして、まず何を思うか知ってるか？」
「知らんよ」
「今日が一四時間もあることにウンザリするんだよ」
「自由が相対的なものだという話か？」
「おまえはいちいち小難しいことを言いたがるな。そんなんじゃない。俺は不自由なんだよ。自由なんじゃない。暇なんだ」
「おまえはいちいち天才だな」
「天才ついでにもう一つ教えてやる」
「何のついでだよ」
「天才ついでだ。このあいだ、マンションから世界を見下ろしたんだ」
　正確に言えば、別れた女のマンションから、街を見下ろした時の話だ。
　まだ薄暗い雨上がりの早朝、階段の踊り場で、宍戸は悴む両手に息を吹き込んでいた。女の出がけを狙っていたわけではない。ただ、街を見下ろしていた。朝靄に包まれた街、でも、その上には澄み渡る青空、そして、富士山が突き出している。水没した街から富士山だけが突き出しているような、不思議な光景だ。
　はじめて女の家に泊まった翌朝、こんな光景があり得るものなのかと驚かされた。この感動を共有したいと女を呼び出せば、眉間に皺を寄せて、早朝に起こされた不満を述べるだけだった。女が部屋の中に消えたのを見届けると、宍戸はその場を後にした。そして、二度と女と会うことはなかった。
　それでも、何度かこのマンションには足を運んでいる。雨上がりの未明、宍戸のアパートが靄が立ちこめていることを確認すると、このマンションに昇るのだ。水に沈んだ住宅街から富士山が突き出しているこんな景色は、このマンションからでないと拝むことができなかった。

女に鉢合わせしたら面倒だが、それは、それで愉快だとも思える。感動のない女だと罵りつつ、どさくさに紛れて、最近、満たされていない相棒を一暴れさせてやってもいい。
「でも、そんなつもりでこのマンションに来た訳じゃないんだ。本当だ。確かに、最近、満たされていない。でも、ちょっと待てよ。いつまで遡れば、満たされていた頃の俺がいる？ そんなことを考えているうちに、街は光に包まれていった。潮が引いていくみたいに。次の雨まで、水に沈んだこの街ともおさらばだ」
「なんなんだ、その語り口調は？」
「おまえも感動のない奴だな。それが、今日なんだ。だからおまえにメールしたんだよ」

「なにかやりたいなってか？」
「そうだ。そんな気持ちにさせられるだろう」
俺は、携帯を握りながら適当に頷くだけだ。

世界の真ん中に僕らは生まれた

小学校までの道のりには、立入禁止の廃工場があった。少年たちは当たり前のように立ち入るのであり、町の平和を守るべく結成された少年団の秘密基地とされた。そのリーダー格はユウキ。この工場の町で、俺は小学校に入学すると同時に、少年団の一員となった。
町の平和を守るといっても、目の前の世界は平和そのものだった。それでも、パトロールと称し、工場の屋上から町中を見下ろしていると、この上ない充足感を覚えた。あの頃の俺たちは世界の全てが屋上から見渡せた。世界の中心に俺たちがいて、世界のはじまりに俺たちは生まれた。みんながいれば何だってできた。指で輪っかを作れば、小学校が収まった。両手を広げてコンクリートを蹴り上げれば、空だって飛べたろう。小学校までひとっ飛びだ。
家に帰ってランドセルを下ろすと、すぐにまた家を飛び出して、秘密基地へ向かった。俺が到着する頃には、決まってユウキがベルトコンベアーに腰掛けてパンをかじっている。はじめの頃は、ここ住んでいるのかと思ったものだ。少年団のメンバーは俺の他に四人いた。ユウキと同級生のヨッチ、力自慢の双子のムジオとトシゾウ、そして、俺の一年後には年下のジテンが加わった。
みんなが集まればユウキの話が始まる。それは陰のボス「ミスター・マスター」からの言葉だ。内容は覚えていないけれど、俺はユウキの話が楽しみで、毎日、工場へ足を

運んだ。話が終わると、みんなで工場の屋上から世界を見渡した。町には民家や田圃が広がり、小学校とゴールデンマーケットを除けば、工場より高い建物はなかった。この屋上からは、どこまでも遠くが見渡すことができた。

秘密基地には、宝箱と呼ばれる蜜柑箱があり、その中には、ボール、グローブ、カラーバットなどの野球道具が収められていた。「ぐんし金」と書かれた貯金箱も入っていて、みんなで一〇円玉を集めた。ユウキが何枚もの一〇〇円玉を入れることがあり、たまに、青空の屋上でソーダアイスを囓った。

「ミスター・マスターからのボーナスだ」と、ユウキは言った。

工場の敷地でムジオとトシゾウがキャッチボールを始めると、その間にカラーバットを持ったユウキが分け入って、いつの間にか野球が始まる。この時のユウキはあまり好きではなかった。フライが飛んでくると怒鳴り声が響く。

「絶対取れよ！」

俺はグローブに入れと祈りながら、両手を上げて目を閉じる。

「ナイスキャーッチ！」

ユウキの声が聞こえるとホッとしたものだ。

「ナイス」「ナーイッス！」

ムジオとトシゾウの声も響いた。

ある日、学校の帰り道にユウキと出くわした。その時、ユウキの家へ招かれ、秘密基地に住んでいるわけではないことを知った。ユウキは首から鍵を下げていた。いわゆる鍵っ子だ。当時、まだ共働きというスタイルが主流ではなく、俺にとって母親はいつだって家にいるものだった。自分で家の鍵を開ける姿はとても大人びて見えた。はじめての寄り道にドキドキしていた俺とは大きな違いだ。

床屋以外でグラビア雑誌を目にしたのも、この時がはじめてだった。ユウキには５歳年上の兄弟がいて、タクヤさんといった。部屋には色々なものが散らばっており、俺は下腹部で何かが疼くのを感じながら、その雑誌を捲った。

その後も、ユウキの家には何度か遊びに行った。タクヤさんに会うこともあった。金髪をオールバックに固めて、悪人の代表格のような格好をしていた。町の平和を守るリーダーに、こんな兄弟がいることは意外だった。それでも、タクヤさんは優しかった。洗面台で金髪をなでながら俺に尋ねた。

「どうかな？ この髪型」

俺は素直に「格好いい」と答えた。すると、鏡に笑顔が映る。お世辞ではなく、金髪もスカジャンも俺の目には格好良かったのだ。ユウキと言葉を交わす姿は、ほとんど見ることがなかった。タクヤさんが帰ってくると、ユウキはブラウン管と向き合って、小豆色のコントローラーをカチャカチャと動かしていた。

後になってヨッチから聞いたことだけれど、ユウキがたまに持ってくる大金は、実はタクヤさんがパチンコで稼いだものだったらしい。

二年生になって、学校の様子が分かってくると、ユウキのいい噂をあまり聞かないことに気がつきはじめた。学校で見かけるユウキはいつも一人きりだった。それは、どうやらタクヤさんと関係があるようだった。

ユウキは傷だらけで秘密基地に現れることもあった。それでも、変わらずベルトコンベアーの上に立ち上がって、「ミスターマスター」の話を聞かせてくれた。そんな時、ヨッチは決まってばつの悪そうな顔をしていた。

その頃になると、ユウキに対する憧れは薄れはじめ、「ミスターマスター」という存在にも疑いを持ちはじめていた。それでも、ユウキと一緒にいたのは、家に遊びに行けば、グラビア雑誌やテレビゲームなんかがあって、たまにタクヤさんがパチンコで当てたチョコレートをくれるからだったのかもしれない。

ある日、少年団にとって最大の事件が起こった。グンシ金が入った貯金箱が消えてしまったのだ。俺たちは呆然として、宝箱の中を見つめていた。

「探すぞ」

ユウキの一声で、俺たちは工場のあらゆるところを探し回った。機械油にまみれて、泥にまみれて、建物の中はもちろんフェンスの外まで探した。そして、夕暮れ近くになって再び集合した。

「何かみつかったか？」

誰もが首を横に振るだけだった。疲れ切ったみんなの顔を見回すと、あることに気がついた。ヨッチがいない。いつだって一緒にいたのに、その日に限っていないのだ。ひょっとして。

「もう暗い、また明日探そう」

翌日、重たい足取りで秘密基地へ向かうと、ユウキは変わらずベルトコンベアーの上でパンをかじっていた。ムジオとトシゾウ、ジテンが集まったところで、ユウキは立ち上がった。やっぱり、ヨッチは来なかった。

「ヨッチが殺された」

突然の告白に、みんな言葉を失った。ユウキは頭を垂れて言葉をつないだ。

「ヨッチは、グンシ金を盗んだ犯人を捕まえようとしたんだ」

驚いたと同時に、ヨッチを泥棒扱いした自分を恥じた。ヨッチに限ってそんなことをするはずがない。ユウキを慕って、ずっと支えていたのがヨッチだったのだから。

ムジオとトシゾウが顔を合わせて呟いた。

「ここにいないほうがいいよな」「いたらいけないよな」

続いて、ジテンに鳴き顔が浮かび、すぐにユウキの鋭い声が響いた。

「忘れたか！？ 俺たちが少年団を結成した理由を。危険から逃げる奴は少年団じゃない！」

ジテンは涙を飲み込んだ。

「ミスターマスターは、そんな俺たちを望まない」

ユウキがその名を口にしたことに、正直、拍子抜けした。既にそんな存在は信じていなかった。

ヨッチだって、ムジオとトシゾウにしたって、俺に向かって得意げに言った。

「ミスターマスターに会ったことがあるぜ」

そして、新たにジテンが加わると、俺自身が同じ台詞を口にしたのだ。

「もちろん。ミスターマスターに会ったことあるぜ」

ジテンは、鼻水を啜りながら言った。

「警察に任せたほうがいいんじゃないかな」
　ユウキの返答を期待したが、案の定、首を横に振るだけだった。そして、落ち着いた声で告げた。
「犯人なら分かっている。今日、再びここに現れるだろう。俺たちの手で借りを返すぞ」

　はじめにその翌日の話をする。俺が秘密基地にやってくると、ベルトコンベアにはヨッチが座っていた。
「ヨッチ！」
　俺は目を丸めて駆け寄った。ヨッチは落ち着いた様子で手を挙げた。
「よう」
　もう一方の手には貯金箱が握られており、ジャリジャリと音をたててからベルトコンベアの上に置いた。
「ユウキはもう来ないよ」
　俺は言葉を詰まらせた。
「あいつ、今朝、引っ越してった」
　ヨッチは微笑み、話を続けた。グンシ金が盗まれたこと、ヨッチが殺されたこと、本当に犯人現れたこと、全てユウキの仕組んだことだった。話の途中で、みんなが揃っていた。目の前で話している少年は幽霊なのかと、誰もが目を丸めている。
「ごめんな。ユウキのわがままにつき合わせちゃって。あいつ、みんなの前でああしないと、気が済まなかったみたいなんだ。ほら、学校で色々大変な目にあってたろ」
　ジテンが顔をくしゃくしゃにして、ヨッチに抱きついた。
「よかった。生きてて」
「ごめんな、心配かけて」
　こうして少年団は解散した。

　ユウキが、犯人は秘密基地にやってくると告げると、続いて、簡単な指示を与えた。誰も犯人を迎え撃つアイデアなど持っていなかったから、ユウキを信じる他なかった。
「分かったら配置についてくれ」
　ユウキは落ち着いており、自信に満ちていた。みんな緊張の面もちで、それぞれの配置についた。はじめに最前線で犯人を迎えるのは、俺の役目だった。
　しばらくすると、本当に犯人が現れた。筋肉が強ばった。男をすぐに犯人だと認識できたのは、その容姿のせいだろう。金髪をオールバックに固め、皮のパンツに両手を突っ込んでいた。悪人の代表格のような格好をしたその男は、タクヤさんだった。
「おい、おまえら、ヒトの金こそこそ持ち出してんじゃねぇぞ！」
　俺は混乱しながらも、ユウキの指示通り、警報のような雄叫びをあげ、工場の中へと駆けていった。
「待て、こら！」
　背後からタクヤさんの怒号が飛んでくる。すぐにも捕まってしまいそうで、俺は必死になって屋上へ伸びる鉄階段を駆け上がった。階段を二度折り返すと、扉のガラス窓か

らジテンが顔を覗かせていた。階段を上りきると同時に扉は開かれ、俺は屋上に飛び出した。
　再び、扉が閉じられる。ジテンはすぐに塔屋の陰に身を潜めた。目の前にはユウキが立ちつくしている。俺はユウキに背を向け、扉へ振り返る。その上には、土嚢袋を抱え上げムジオとトシゾウがスタンバイしている。鉄階段を蹴る足音が近づき、扉のガラス窓から金髪が覗いた。俺は腕を伸ばして三本指を立てた。
「三、二、一」
　扉が開くと同時に腕を振り下ろす。落とされた土嚢袋は頭の上で弾け、中身の石灰が飛び散った。タクヤさんは無言のまま崩れ落ちた。あたりは真っ白な煙に包まれ、その中から、ムジオとトシゾウの声が聞こえてきた。
「やった」「やったぞ」
　俺は目を細め、腕で口元を塞いだ。ユウキは背後から俺の肩を叩き、そのまま煙の中へ歩いていった。冷たい風が煙を舞い上げると、ムジオとトシゾウが咳をした。煙が晴れると、ユウキ細い腕が真っ白い顔したタクヤさんの襟首を掴んでいた。
「なんのつもりだテメエ」
　力無いタクヤさんの声がする。続いて、今まで聞いたこと無いくらい大きな声が、屋上から世界中に響きわたった。
「全部テメエのせいだろうがぁ！」
　そして、ユウキの小さな拳が振り抜かれ、タクヤさんの頬をぶっ飛ばしたのだった。

宍戸シング・プライセス

　暖簾を掻き分けて店内を覗くと、宍戸はいつものポジションを陣取っていた。いい塩梅な塩加減の握り飯を囓って、いい案配な歯ごたえの牛すじ煮込みをつまんでいる。
「実にいい塩梅だね」
　酒は飲まない。タバコも吸わない。浮いた話もしばらく聞かない。
「光の三原色ってのはよ」
　カウンターに肩を並べると、つまみ上げたすじ肉を眺めている。蛍光灯を反射する脂身を眺めながら、先月も聞いた話を繰り返しはじめた。
「ニンゲンには、色を感知する細胞が三種類しかないってことなんだよな」
　気のいい店長は、小鉢に万能ネギを添える最中でも、笑顔を絶やさない。
「ＲＧＢで全てが表現できますなんて偉そうに言うけど、それしか見えてねぇってことなんだよな」

繰り返すが、宍戸は酒を飲まない。別に酔っているわけではない。どこからか仕入れたその話が、最近のお気に入りなんだろう。
ＲＧＢってなんだ？ と思いつつ、俺はいい加減に頷き、カウンターの向こうをぼんやり眺めた。スキンヘッドにラウンド髭を生やした店長が、太い指で器用に菜箸をあやつる。なかなか見応えのある調理場だ。
黒々と体毛を生やした腕が伸び、最上級の笑顔をとともに小鉢が差し出された。
「おまち」
思わず笑いそうになる口元を窄み、小さく頭を下げた。牛筋煮込みに続いて、角皿に並んだ握り飯が差し出される。
「これは俺のおごりだ。あとは好きに頼め」
「じゃぁ、生」
「俺、同じのね」
「まいど」
間もなく、生ビールと、追加の牛筋煮込みが差し出された。
「乾杯」
とはいっても、一方は小鉢だ。俺がジョッキを持ち上げて喉を鳴らすと、宍戸は隣でクチャクチャとすじ肉を噛む音を響かせた。
宍戸は大学で知り合い、卒業後もつき合いのある数少ない友人の一人だ。職に就かず惚けているが、バイトの給料が入ると、俺を呼びだして酒を飲む。とは言っても飲むのは俺だけ。店は決まってここだ。大学近くにあるのだが、学生が飲むような大衆居酒屋ではなく、在学中にはその存在すら知らなかった。
「店長の笑顔は今日も素晴らしいね」
なかなか言えるものではないことを、自然に言えてしまうから不自然だ。
「ありがとうございます」
店長は、それを受けて、さらに素晴らしい笑顔を返す。思わずジョッキに描かれた恵比寿と見比べた。
「店長の顔を拝んでると、明日もいいことがありそうな気がするよ」
宍戸も同じような顔になって、両手を摺り合わせた。
「いや、本当。総理大臣とかやったほうがいよ。国連事務総長とかね」
店長は口数が少ない。顔を赤らめて「いやいや」と首を振るだけだ。宍戸の取り扱いに困っているのは明らかで、俺は助け船を出す。
「婆さんを思い出すんだろ」
途端、宍戸はカウンターに肩肘着いて、俺の方に向き直った。
「そうなんだよ」
またお決まりの話がはじまる。宍戸は同じ話しを何度もする。定期的に俺を呼び出すが、いつだって新しい報告はなく、一方的に同じ話しを続ける。単なるガス抜きのようでもあるが、忘れたくない話を再確認しているようにも思える。苦ではなかった。お喋りは苦手なほうだから、勝手に喋ってくれる相手とは馬が合う。
宍戸の婆さんは娘に恵まれたためか、孫息子の扱いには不慣れなところがあったようだ。俺の息子もそうであるように、男子は生まれながらに愛すべき阿呆である。家にい

れば襖に突撃する。外に出れば水たまりに突進する。その都度、宍戸には激しい雷が落とされた。幼いころ、婆さんの家を訪ねる盆と正月は、気の滅入るで時節あった。

引き替え、爺さんはひょうきんなヒトだった。夕食の度、熱燗で顔を赤らめ、ひょっとこのような顔をしてみせるのだ。爺さんだってかつての男子、やはり先天性の阿呆である。孫が喜べば何度でもやってみせた。爺さんがひょっとこの顔をすると、宍戸は小猿のような声を上げる。阿呆と阿呆のせめぎ合いだ。

その反面、爺さんは元祖引きこもりでもあった。熱燗が空になれば、すぐに書斎へ閉じこもってしまう。取り残された宍戸は消化不良となった。そして、襖に突撃する、ロッキンチェアを漕ぎまくる、木彫りの熊に威嚇する、などのことをして、婆さんに雷を落とされるのだ。

宍戸が中学生の頃、爺さんは先立った。婆さんは、宍戸に落とす雷とは比較にならないほど大きな声で泣き崩れた。宍戸も思わず泣いた。親戚一同はその姿に心打たれた様子であったが、実は悲しかったのではない。怖かったのだ。いつだって眉を釣り上げていた婆さんがあんなになってしまうことで、はじめて人の死というものを実感したのだ。

それから婆さんは随分と小さくなってしまった。成長期だった宍戸が大きくなったせいもあるが、それだけではない。中学生ともなれば、襖に突撃することも、木彫りの熊に威嚇することもなくなったが、たまにロッキンチェアを漕ぎまくる。そんな時でも、婆さんはぼんやりと微笑んでいるだけだった。シワシワの顔に眺められているのは、あまり心地いいものではない。

宍戸は耐えかね、無理に話題を投げかけた。

「俺、ベースを買ったんだ」

とても婆さんに聞かせる話ではない。それでも、婆さんは応えた。

「そうかい」

「バンドを組むんだよ」

「そうかい」

少女に戻ってしまったような、あるいは、生きながら涅槃に達してしまったような。婆さんは何を聞いても、細い目を少しだけ見開いて、そうかいと応えるだけだった。

もともとあまり色々なものに関心を示すヒトではなかった。テレビを観るでも、ラジオを聴くでもなく、世界を傍観し、たまに童謡を口ずさんだ。宍戸が現れなければ、ずっとそうしていたのだろう。それなのに、突然、阿呆が現れ、襖に突撃する、ロッキンチェアを漕ぎまくる、木彫りの熊に威嚇する。婆さんはとても傍観するだけではいられなくなったのだ。

「俺のせいで無理させたと思うよ。爺さんが死んじまって脱力したんだろう。そんで、本来の姿に戻ったんだ。その頃には、俺ももう中坊だったから、ひどい阿呆もしなくなったしな。それからは、なにを言ってもそうかいだ。俺も、ああなりたいもんだ。世界を傍観して、全てを肯定してやるんだ」

ロッキンチェアに爺さん婆さん。爺さんはGじゃないか。

「その点、おまえはあまり俺を否定しないのがいいな」

まったく別のことを考えていたとは言えず、俺はとっさに応えた。

「そうかい」

毛深い腕が、追加の生ビールと牛筋煮込みを差し出した。
「これ一杯やったら帰ろうか」
宍戸は三杯目の牛筋煮込みに手をつけた。俺が喉を鳴らすと、隣でクチャクチャと音を立てる。ジョッキを下ろして一息つくと、宍戸が箸で俺を差していた。
「でもな、調子乗るなよ。婆さんの肯定っぷりは半端ないぞ」
なんだかんだと、あいつは俺を否定する。

とりかえしのつかない夜

冷たい夜風が吹きつけ、俺は腕の中の息子を強く抱き寄せた。
「うう、寒い」
傍らに目を落とすと、さっきから彼女の様子がどうもおかしい。
「どうした？」
「この炊飯器、九八六〇円って書いてあったじゃない」
「そうだっけ？」
「でも、九二〇〇円だったのよ」
「よかったじゃん」
「でも、ポイントがつきませんって言われたのよね。どうせ五％だから割引率のほうがいいんだけど」
「よかったんじゃない？」
「よかったんだけど、はじめっから書いておいて欲しくない？ 安くなればいいってものなの？ 別にいいんだけどさ」
彼女は別によくなさそうな表情で、微笑む息子の頬をつついた。確かに恩着せがましい割引かもな。俺は曖昧に頷いて夜空を見上げた。
不意に彼女の気配が消えたかと思えば、ドラッグストアの前で立ち止まり、ガラス越しに店内を覗き込んでいた。
「ちょっとゆっくり歩いてて。すぐに追いかけるから」
そう言い残して店内へ消えた。
取り残された俺は、腕の中の笑顔に溜息をひとつ。
「こんな寒い夜にゆっくり歩いていられるか」
ささやかな抵抗として、むしろ歩調をあげることにした。
横断歩道にさしかかると、一台の車が近づいてきた。ここは言うまでもなく歩行者優先である。その上、乳離れしたばかりの幼子を抱えているのだ。車が止まるのは当然の

こと。そうと信じて歩道を渡りはじめるが、車は速度を落とす気配がない。しかし、これは国が定めたルール、こちらが立ち止まる理屈はないのだ。俺はチキンレースに挑むジェームスディーンの気持ちになって、横断歩道を突き進んだ。

スリップ音が耳を劈き、車は止まった。

「危ねぇじゃねぇかぁ」

そう叫んだのがドライバーのほうだから呆れてしまう。運転席から覗かせたその顔はあまり穏やかではない。

「危ないのはチンピラちゃんの方でちゅよねぇ」

息子に同意を求めるが、どうやら遠くを走るバスに目を奪われているようで、こちらの言葉など皆目聞いていない。チンピラの目に、俺は子供に相手されない哀れな親父として映っただろう。薄ら笑いが聞こえた気がして、六秒ほど我を失った。

気づいた時には運転席のドアを蹴り上げていた。

「てめぇは仮免中の盆暗か、阿呆んジャラぁ」

俺が柄にもなく声を荒らげると、チンピラはチンピラらしい振る舞いで、鉛の円筒を額に押しつけてきた。俺は額に皺を浮かべて目を寄せる。助手席には、生肉でも喰ったように唇を赤くした女が座っていた。

「あんた、やめなさいよ」

生肉女が肩に手をかけると、チンピラは俺から目を逸らし、女の手を払い除けた。その瞬間、俺は銃の握られた手首を掌低で突き上げた。チンピラは窓枠に手首を打ち付け、「ヒンッ」と雌山羊のような声をあげた。手放された銃は回転しながら宙を舞う。俺はそいつを掴みとり、チンピラの口の中へ銃身をねじ込んだ。もう一方の腕には息子が抱えられている。大人には到底真似できない笑みを浮かべて、対向車線を近づいてくるバスに手を伸ばしていた。

「我戯画裸擬言我下米」

チンピラは癇癪を起こした幼子さながら喃語を喚き散らした。生肉女は後ずさり、助手席側のドアから逃げ出そうとしている。恐怖で手が震えているのか、なかなか鍵が開けられない。俺は銃身をチンピラの左奥歯の方へ押し込み、その銃口を女の後頭部に向ける。

「おい女」

品のない唇がこっちを向いた。センターラインに立つ俺の背後を、クラクションを鳴らしながらバスが通り過ぎてゆく。息子はますます大きな身振りで歓喜の声をあげている。

俺は引き金を引いた。

チンピラの頬が破れ、血肉をまき散らしながら奥歯と弾丸が飛び出した。女は血肉を浴びながら果敢にもその弾丸を飲み込んだが、そんな芸当は到底不可能だ。真っ赤な唇に吸い込まれた弾丸は、食道を通るわけもなく、一直線に後頭部を突き破った。助手席の窓には弾痕が残され、同心円上に鮮血が吹き付けられた。

バスが過ぎ去ると、あたりは静まり、チンピラの呻き声だけが響いた。俺は拳銃を車内に放り込み、チンピラに背を向けた。そして、ようやく横断歩道を渡りきることができたのだ。

一通りの妄想が終えた頃には家に辿り着いていた。そこで携帯電話が震えた。
「ゴメン。今どの辺？」
「何処だっていいだろう」
俺は意味も無くハードボイルドになって、無愛想に電話を切ってしまった。
「あ」
間もなく息を切らせた彼女が帰ってきた。そして、俺に尋ねる。
「なんか機嫌悪くなかった？」
妄想中だったとも言えず、俺は返答を詰まらせた。ますます空気が錆び付き、彼女は首を傾げる。こうして『何だかよく分からないけれど機嫌が悪い旦那』は造られるのだ。
こんな夜は、熱いシャワーで妄想を洗い流し、早く寝てしまった方がいい。
「今日は俺がこいつを寝かしつけるよ」
「なんで？」
「何故だっていいだろう」
嗚呼。

そこなしぬまからビッグバン

この町に巨大ロボットのような近未来型のマンションが建ったころ、俺はザリガニ沼の大岩の上で、パンツ一枚になって両膝を抱えていた。なんでパンツ一枚かって、マンションを見上げたら、突然、足元が揺らいで沼に落っこちてしまったんだ。底なしだって言われていたから、俺は必死になって這い上がったよ。
「おぉスゲェ。見ろよ。マッカチン」
ミツヤは四つ手を引き上げ、満足げな表情を浮かべいた。
本当はハルオなんだけど、あいつの家に遊びに行くと、おばさんがいつもサイダーを出してくれる。だからミツヤ。
俺たちのクラスには大きな水槽がある。ブルという名前の珍しく青いザリガニがいたんだけれど、スルメを食べ過ぎて死んでしまった。ブルはミツヤがこの沼で捕まえたんだ。正確には二ホンザリガニと言うらしい。またここで捕まえようってことになったんだけれど、網にかかるのは真っ赤なアメリカザリガニばかり。ミツヤが手を伸ばせば、両手を広げて後ずさりした。
俺はすっかり気が滅入っていて、本当のところ、二ホンだろうがアメリカだろうが、もうどうでもよかった。
昨日、川岸で遊んでいたらサワガニがいたんだ。テトラポットにつかまって、水面か

ら顔を覗かせていた。ブルに代わる新しいアイドルにしてやろうと、テトラポットに足をかければ、俺は見事に足を滑らし、そのまま川にドボンだ。

びしょ塗れになって家に帰ったら、こっぴどく絞られたよ。

「一人で川に行っちゃいけません」だって。

その次の日にこれだ。もう太陽が傾きだしているし、大岩に広げた服は乾きそうもない。沼に来ちゃいけないとは言われてないよな。でも、許されるわけないよな。沼に落ちたことがばれたら怒られる。帰りが六時過ぎても怒られる。絶体絶命のピンチだ。

はじめに思い浮かべたのはドラえもん。その次にタイムマシン。無塗装ステンレスボディのタイムマシンだ。携帯電話でお風呂が涌かせる時代なのに、たった1時間前に戻ることができないなんて。科学者はいったい何を目指しているのだろう。

ある理論物理学者は言っていた。未来からの旅行者が未だかつて存在しないのは、タイムマシンが不可能な証拠です。それって誰でも思いつきそうなことだし、面白くないね。

ある説では、タイムマシンが完成された時より過去にはタイムトリップしようがないんだとか。それならば、未来からの旅行者がいなくてもおかしくはないし、まだ夢がある。

でも、それでは困るんだ。今、この時から一時間だけ巻き戻したいのだから。タイムマシンの完成なんて待ってはいられない。

全ては特別な状態からなんでもない状態へ流れるんだって。それが時間の流れる方向なんだって。以前、博物館で大きな振り子を観たよ。いつまでも揺れ続ける振り子には、時間なんてない。一〇年前だって、一〇年後だって、振り子は振り子。それどころか時間を逆回しにしたって、やってることは同じなんだもの。

何でもない状態には、時間が存在しないって話。

俺はきっとザリガニ沼にズブズブと沈んで、プランクトンに食い尽くされてしまえば良かったんだと思う。ドロドロになってしまえば、そこには時間なんてなくって、もう何にも心配することはない。

「おい、いつまでしょぼくれてんだよ」

ミツヤが石を放り投げた。夕空にゆったりと弧を描くそれを目で追いかけた。マンションに反射した西日が目に飛び込み、俺は目を細めた。その瞬間、石は急に方向を変え、垂直に落下したように見えた。石が沼に吸い込まれると、水面が大きく歪んで落ち込んでいった。続いて、反動で水面は膨れ上がり、中心から小さな水柱が立ち上がる。そして、同心円状に波紋を広げた。水面を滑るように波紋は進み、水草を揺らして、大岩にぶつかった。

俺は目を見開いた。沼から突き出ているはずの大岩が、波紋に飲まれ、水中にあるかのように揺らめき出したんだ。

「なんだよ、これ！？」

俺は慌てて立ち上がり、逃げるように岸へと飛び跳ねた。

振り返れば、表情の固まったミツヤが波紋の中で揺れている。そして、ザリガニ沼全体が、巨大ロボマンションが、夕空が、次々と波紋に飲まれていく。景色は霞み、だんだんと息が苦しくなってきた。声を出そうにも、空気が薄くて響かない。

気が遠くなると、恐怖心が取り除かれた。
　止めなきゃ。
　熱を出した夜の夢の中のように体が動きにくい。俺は懸命に地面を蹴り、再び大岩に飛び乗った。そして、波紋の中心を覗き込むと、不意に、体は軽くなり、その中心へ吸い込まれていった。

　ん きっと沼の底だろう 見渡す限り均一死んじゃったのかな 意識はあるけれど 他にはなにもない 嘘だ なにかある縦横無尽に蠢いている 均一な縦横無尽 とにかく観察だ 出口を探せ不均一を探せ どっちに進もう どれだけ進もう いつまで進もう 悩んでも進んでも 大した違いはない だって どこもかしこも縦横無尽鼻歌でも歌いたいけれど 歌を振動させる空気がない どれだけ進んだどっちに進んだ いつまで進んだ 俺はついに不均一に出会う 拍動だ不均一としてはレベルが低い レベルだって はは 笑える等間隔という規律がある 自分の中にもあった 命のシンボルみたい 暖かい同時にとても不安 きっと縦横無尽のエンジンだ 縦横無尽の心臓部 あ言っちゃった どくどく そう心臓 心臓みたい 出口を探せ 心臓を探せ どれだけもういいや どうせ一瞬だから 全部同時進行だから 拍動の中心 全然暖かくないとても不安 終わりにしてやる その心臓を喰ってやる そして 俺は再生する不均一のレベルを上げる レヴェル はは 俺はまだ笑える 出口を探せもっと笑え声を上げて笑え でも 空気がない 両手を打って笑え腰を振って笑え でも 両手がない 腰がない 嗚呼 両手が欲しい 腰が欲しいもっと笑え ここからもう一度 俺は発生する 不均一のレヴェルをあげて時間を遡る 出口を探せ 質量を生め 無からの創生 その確率はゼロにならないこの表現はいいな 無限分の一ではない 虚数分の一でもないその確率はゼロにならない 有限の確率になることに気付いたのです だから俺だって 質量を生む 両手が欲しい 腰が欲しい 大声で笑える空気が欲しい等間隔だった拍動が加速する 不均一のレヴェルが上がり ここに一粒無からの創生

　そして 急激にインフレーション あとはなす が まま

　この町に巨大ロボットのような近未来型のマンションが建ったころ、俺はザリガニ沼の大岩の上で、パンツ一枚になって両膝を抱えていた。なんでパンツ一枚かって、マンションを見上げたら、突然、足元が揺らいで沼に落っこちてしまったんだ。底なしだって言われていたから、俺は必死になって這い上がったよ。
「おぉスゲェ。見ろよ。マッカチン」
　げげっ。

宍戸デイドリーマー

　ダイニングで音を絞ってテレビを見ていると、息子を寝かしつけた細君が寝室から戻ってきた。カレンダーを眺めながら彼女は言った。
「もうすぐ宍戸君の誕生日じゃない？」
「そう？　よく覚えてんな」
「友達でしょ。誕生日くらい覚えときなさいよ」
「三五か」
「そんなにだっけ？」
「あいつ、二浪してるからな」
　宍戸と俺は大学で出会った。二浪して三流大学だ。あまり出来のいい高校生ではなかったのだろう。盗んだバイクで走り出す。夜の校舎の窓ガラスを壊して回った。という類の男ではないが、あまりお勉強が好きではなかったようだ。協調性がないから、部活動なども続かない。それでいて、生真面目なところもあり、学校に禁止されれば、アルバイトもしなかった。
「面倒になると面倒だからな」
　そういう類の男だ。
　浪人生になると、多少アルバイトをするようになり、はじめて自由な金を手にした。
　一年目の夏にバイクの免許をとった。しかし、あいつがバイクに乗っているのは見たことがない。
「取っておけばいつだって乗れるだろう」
　二年目の春にギターを買った。鬼のような形相が印象的なエピフォンＳＧ。しかし、大学でバンドを組んだ時、まだＦコードが押さえられなかった。
「買っておけばいつかは弾けるだろう」
　そんな調子で、三流大学の入学にも二年を必要とした。
「でも、入れただろう」
　俺自身、偉そうに言える立場ではなく、わりと苦労して、どうにか三流大学に補欠入学した。推薦という名の裏口を使わなかったことを自負している部分があったが、声がかからなかっただけのことだ。高校在学中、その手の労力をかけることを怠っていた。ベクトルは違えど、面倒なものは面倒だ。あいつと意気投合してしまった（？）理由は、なんとなく分かる。
　共産主義国家を理想とした元革命家の最高幹部が、脳腫瘍のため獄中で死亡。テレビが訃報を伝えた。
「たまに哲学臭いこと言うよね」

「この彼女？」
「宍戸君よ」
「なんか言ってたっけ？」
「忘れたけど」
「それ、本当に哲学だったのか？」
「何だっけ？ 長生きしたいんでしょ」
「それ、哲学なのか？」
　一日二公演で『イマジン』を歌う羽目になるとウンザリする。作った当人の証言。
「その話を聞いて、ようやく好きになったよ」と、宍戸は言った。
　俺と宍戸は大学で出会い、太鼓の叩ける気のいい後輩を巻き込んでバンドを組んだ。専らカバーだったが、そんなに大それた曲はとても演れず、あまり知られていない、でも、どこか聞き覚えのあるパンクロックを好んだ。聞き手を飽きさせず、それでいて、下手がばれにくいナンバーだ。ツインギターに正確なドラム。リズムがとれていれば何とかなった。でも、きっと下手はばれていただろう。
　朝っぱらから『ステッピン・ストーン』を何度も演るとウンザリする。が、それほど悪い気はしない。嗚呼、カタルシス。空気の澱んだ練習スタジオを後にして、陽の光を浴びながら背筋を伸ばす。嗚呼、フリーダム。バンドは朝練にかぎる。
　地下スタジオから日光を求めて這い上がる階段の途中には、既にこの世にはいないロックスター達の顔が並んでいた。
「死んじまった人間は気楽でいいわな」
　恋人を殺そうが、ヘロイン中毒だろうが、若くして死んでしまえば英雄視されるのだから、時の人というのはたいしたもんだ。
「どうせなら、ご長寿世界一で有名になりたいね」
　宍戸はそんなことを言っていた。誰よりも年寄りになって、皺だらけの気色悪い顔で笑ってやる。長生き以外に取り柄のない男が、世界中を見下ろして言うんだ。
「儂が全部許してやろう」
　誰も聞いちゃないだろうけどね。
　彼女が十二人の同志を死に追いやって以降、国を変えてやろうという運動は一気に衰退した。
　七二年以降に生まれた俺たちは、今日も温々生きている。
　日本の平均寿命はますます上がり、過去最高の男：七九．三歳、女：八六．一歳。
　先日、世界最高齢一一四歳の女性が亡くなったが、今年のうちにその記録も更新されるだろう。
　宍戸は今日も夢に向かって懸命に生きているはずだ。

落とし穴　落ちた

砂浜を走る姿が絵になるのは、相当な脚力の持ち主に限られる。

内陸生まれのためか、朝一番の海岸を走ることに憧れがあった。三日以上続いたことのない朝マラソンが、五日続いたこともあり、俺は旅行鞄にジャージを詰め込んでいた。ポケットに入れた携帯電話のバイブで目を覚ますと、まだ寝顔の彼女を残して、そっと部屋を後にした。

走り初めて一五分、すぐに息は切れ、もう引き返そうかと考えていた。幸い、砂に足を取られて不格好に走ったところで、季節はずれの海岸には、ほとんど人影がなかった。遠くに見えるのは、驚くほど大きな犬を連れた女と海を眺める少年くらいだ。

速度を緩めて大きく旋回すると、随分と近くに旅館が建っていることに驚いた。帰りは散歩に切り替えた。

少年は砂浜で膝を抱えていた。小さな美しい背中。どこか不機嫌な背中。心惹かれてしまう理由は、自分の少年時代と照らし合わせてしまったからだろう。

「このクラスに虐めがあるようです」と、先生は言った。

俺は、秀でた特技もなく他人にからよくかわれる質だった。それでも、それが虐めだという認識はなかった。誰かが要らぬ気を回して告げ口したのか、それとも、冗談の過ぎる行為が先生の目にとまったのか。俺はその発言に驚かされ、大いに狼狽した。先生が俺のことを虐められっ子だと宣言したのだ。虐めなんて、当人の認識ではじまるものだろう。

その一件から、皆が優しくなったとか、または本格的な虐めがはじまったとか、そんな効果はまるでなかった。唯一の効果といえば、俺の心に虐められっ子だという烙印が押されたくらいだ。そして、俺の空回りがはじまった。空元気、愛想笑い、それは烙印を隠すための演出だ。あの少年のように、不機嫌でいることができなくなったのだ。

俺は吸い寄せられるように、少年に近づいていった。音が立つほど砂を踏みしめたのは、振り返ることを期待したから。少年の脇には砂山ができていた。気づいてはいたが、疑問に思うことはなかった。

それがまずかった。

次の瞬間、足が地球に飲み込まれ、俺は大きく体勢を崩した。そして、キャキャキャという小猿のような声が遠のいていった。

少年の頃、誰しも一度は作った傍迷惑な穴。酷いものでは猫の糞などが供えられた穴。なかなか落ちてくれる者がいない穴。しかし、何故だか俺は穴の中で藻掻いていた。墓場鬼太郎の誕生さながら必死の形相で地中から手を伸ばしていた。

ようやく這い出し、仰向けに倒れた。つま先を持ち上げると、ジャージの足首まですっ

かり水に浸かっていた。穴の底に海水が染み出していたのだろう。猫の糞でなくてよかった。思わず胸を撫で下ろすが、安心している場合ではない。俺は咄嗟に四つん這いになり、辺りを見回した。しかし、少年の姿はすでになかった。彼方で女の連れた犬が吠えていた。

溜息とともに、もう一度仰向けになった。足を擦り合わせて靴を脱ぐ。続いて、足の指を巧み使って靴下を脱ぎ捨てた。大の字になって空を見つめれば一面曇天。かといって雨の降る気配はない。このまま雨にうたれて屈辱的な思いを洗い流したいところだが、砂の上でびしょ濡れになるのは、実際のところ困る。

「バカヤロ」

こみ上げる苦笑。鼻の奥がツンとして涙が溢れた。俺は目を閉じて言い訳を考えていた。穴に落ちた言い訳。そして、少年が穴を掘った言い訳まで考える。小さな美しい背中を持つ少年が、何故こんなことをするのか。いくら考えを巡らせても、耳には小猿のような笑い声が残響する。無差別な悪意としか思えない。少年特有の、怖いもの知らずな馬鹿さ加減が成せる穴だ。

「バカヤロ」

少年に敬意を込めて、もう一度呟いた。

「なにそれ、落とし穴？」

驚いて目を開けば、俺を見下ろす彼女があった。

「陥穽」

「なにそれ？」

「落とし穴のこと」

「そんな言葉があるのね」

「前に調べたんだ」

「どんな時に調べるわけ？」

いつ調べたのだろうかと思い返してみるが、別に回答を求めているわけではないだろう。彼女は目の前に広がる海を見つめて、「海です」と呟いた。そして、再び俺を見下ろす。

「感想をどうぞ」

「感想？」

「海に来たかったんでしょ」

俺は、すっかり耳に馴染んだ波音にあらためて耳を傾けた。

「そうね。海はいいよね」

「なにそれ」

俺が虐められっ子だったことを、彼女に話したことがあったろうか。あの頃、もう一つ手にしたものがある。自意識。それも、やや過剰気味なやつ。少年にとって最大級の敵であり、未だ克服できないていような気がする。きっと、話したことないだろうな。

黒髪が彼女の白い頬を擽る。きれいだ。思っても口にしない。もし、炎天下のビーチだったら、語尾を弾ませながら、冗談めかして言えたかもしれない。でも、ここは曇天の海岸。俺はいたって平常心だ。でも、少しだけ素敵なことを言いたい。嗚呼、脳味噌はいつだって考えすぎる。

「あっ、あいつ――」
　あいつが思考を遮った。俺は声をあげて立ち上がった。
「あの子が掘ったのね」
　女の勘は鋭い。俺は顔の表面温度を二度ほど上昇させた。何を企んでいるのか、少年は真っ直ぐにこちらへ戻ってくる。強力な自意識が俺に課題を示す。如何に大人たる仕草であしらうべきか。
少年は目の前で立ち止まると、強張った表情を弛緩させた。
「死んだかと思った」
　思わぬ発言に拍子抜けした。
「縁起でもないことを言うな。落とし穴で死ぬ奴がいるか」
　幼い思考に口元が緩むが、笑っている場合ではない。
「随分と酷いことをする奴だな」
「ヒトが落ちるとは思ってなかったよ」
「こっちだってそうだ」少年は落ち着きのない様子で辺りを見回した。
「熊みたいな犬を見なかった？　あいつ、いつもこの辺を駆け回っていてるんだ」
　女の連れた巨大な犬を思い出した。
「飼い犬だろう」
「あの人、いっつもこの辺で鎖を外すんだよ。あんな犬が駆け回るから、妹が海岸に来ようとしない」
「妹がいるのか」
「そうだよ。だから、痛い目に遭わせてやろうとしたんだ。でも、犬は落ちなかったし、代わりにあんたが落ちた」
「その割には随分と笑ってたな」
「だって笑えるじゃん」
　俺は絶句し、彼女の笑い声が響いた。
「あんたら恋人？」
「夫婦よ」と、彼女が答えた。
「そうか。子供は？」
「そういう質問はするもんじゃない」
　俺は苦笑いを浮かべて、小さな額を人差し指で押した。
「なんで？」
　少年は目を丸めて首を傾げた。何故かと問われると、うまい答えが見つからない。
「そういうもんだ」
「君みたいな子が産まれるといいわね」と、彼女は微笑んだ。
　少年は彼女に歩み寄り、しばらく顔を見上げると、何か知ったように二、三度頷いた。

「きっと可愛い女の子だよ」
　俺は鼻を鳴らした。
「適当なこと言うな」
「なんでだよ。絶対そうだって！」

突然の大声に、俺は半歩後ずさる。
「ねぇねぇ、なんで女の子なの？」
彼女は前屈みになると、目を輝かせながら少年の声に耳を傾けた。俺はもう一度鼻を鳴らし、砂山を蹴り上げた。砂は崩れ落ちて、穴を埋めていく。俺は忌々しい穴を埋める作業に没頭しながら、貧相な思考回路を回した。
少年の妹は犬に噛み殺されてしまいました。そして、少年は仇討ちを計画しました。しかし、罠にかかったのは犬ではなく哀れな男でした。男には身ごもる妻がいました。そして、少年は生まれ変わった妹と再会するのでした。めでたし。
話が済むと少年は走り去っていった。少々つまらない気分になった俺は、あえて何も尋ねない。
「多分、可愛い男の子よ」
俺はまた鼻を鳴らす。
水平線を見つめる彼女の目は、確信に満ちていた。

三輪バギーに鉄パイプ

鉄パイプを肩にかけて親父が現れた。ヘルメットを被って、母さんの三輪自転車に跨って、本当にやってきた。満面の笑みを浮かべながら、俺の親父がやってきた。
「お、親父」
八人のギャングに囲まれた俺は急に肩の力が抜けた。親父が笑っている。俺も笑えた。俺の死に場所はここじゃないんだ。目の前にはまだ曲がりくねった一本道が続いていて、地平線のその先に消え入ってしまうほどに伸びていたのだ。

必死の形相で三輪自転車を漕ぐ男は、ヘルメットを被り、鉄パイプを担いでいた。浅黒い顔にしわを浮かべた男は、初老といってもいい。あまり物騒な感じがしなかったのは、その鉄パイプのせいだろうか。男の肩にかけられたそれは、自転車の遙か後方まで伸び、三メートルはあろうかというものだった。
すれ違う誰もが身を引いた。そして、男の背中を見送ると、首を傾げた。

俺は廃工場で鉄パイプとヘルメットを拾い上げ、女房が遺していった三輪自転車にまたがった。三〇もとっくに過ぎた息子のために、何を好きこのんででこんな真似をしているのか。それでも、あいつと約束したことだ。どんなに阿呆な愚息であろうと、見捨てるわけにはいかないのだ。

あいつが見下ろしているであろう空を仰いで、俺はペダルを踏み込んだ。

誰の視点で、どんな書き出しにしようかと悩んだが、どう脚色したところで素敵な話にはなり得ないことに気がついた。ここは無難に、俺の視点で時系列に沿って書くことにする。まず、俺が何年かぶりに親父に電話したところからだ。
「俺だ。やばいことに巻き込まれちまった」
「誰だおまえ？」
聞かれたから名乗ったのであるが、携帯電話を通じて忌々しい笑い声が返ってきた。あんたが付けた名前だろう。
「で、いくら振り込めばいいんだ？」
物分かりのいい親父だと感心するが、そうではない。完全に誤解されている。
「ウチの阿呆は、俺に電話なんかしてきやしないよ」
「そりゃそうだよ。緊急でなきゃ電話なんてするわけないだろう」
「金が欲しけりゃ、テメェで取りに来い」
親父の声は次第にトーンが上がり、俺は耳から電話を遠ざけた。正面にはブルース・ブラザーズのような格好した四人組が、口を一文字に閉ざしたまま、俺を見つめている。俺は情けなく眉を下げ、口元だけで笑みを浮かべた。そして、「母さんがいりゃな」と、こぼして、電話を切った。
金のあてがないことを知ると、ブルース四兄弟は背後から俺の腕を捻り、尻を蹴り上げた。俺は情けない格好で歩き出し、プレハブ小屋の外に出た。再び、合皮の革靴がケツを撃つと、俺は鉄階段を転げ落ちた。世界が廻り、地面が迫る。
俺はうずくまり、激しく打ち付けた鼻を両手で押さえた。涙が出たが、鼻血は出ていない。手放した携帯電話が地面で震えている。俺はゴキブリのように地面を這い、とっさに手を伸ばした。
必ず助けるぞ（！　７！）
不可解な顔文字らしきものが添えられたメールは、親父からだった。鉄階段を踏みならして奴らが降りてくる。俺はとっさに携帯電話をポケットに突っ込んだ。奴らは再び俺の腕を取り、尻を蹴り上げた。タイミング良く後部座席の扉が開かれ、俺は頭からシートに飛び込んだ。続いて、両扉から二つのケツが乗り込むと、俺を挟み込んで車は動き出した。
状況が芳しくないことはよく分かる。これから皆でボーリング場に行くわけではないだろう。嫌なことは先延ばししたい質だから、どこに行くかは尋ねない。もっとも、何を尋ねたところで、この無愛想なブルース四兄弟は何も答えないだろう。役立たずの男は東京湾かな。なんでこんな目に遭うのかな。理由は分かっている。端的に言えば、俺の所持金では解決できないものに手を出した。ザッツ・オール。
やがて本当に海が見えてきた。こんなに気持ちの晴れない海もないが、「海ぃ！」と、闇雲に叫びたくなる気持ちがないでもない。
埠頭の手前で車は止まった。日本人とは異なる肌色をした男がやはり四人。ラテン系のサボテン四兄弟。俺はどうやら引き渡されるらしい。臓器ごとにばらされて売られるのか、はたまた、激しく洗脳されて戦士に生まれ変わるのか。

どっちがいいだろ？
ブルース四兄弟は、俺を車から引きずり下ろすと、腕を捻って、尻を蹴り上げた。お前らはそれしかできんのか。いい加減、俺も対処方法を学んだ方がいい。そろそろ尻に第二の亀裂が生まれそうだ。
地面に膝を突くと、後ろ手に縄を結ばれた。その時だった。突然、ゴムの擦れるブレーキ音が耳を劈いた。驚いて目を向ければ、見慣れた三輪自転車が、大きく弧を描いて後輪を滑らせながら停車した。
鉄パイプを肩にかけて親父が現れた。ヘルメットを被って、母さんの三輪自転車に跨って、本当にやってきた。満面の笑みを浮かべながら、俺の親父がやってきた。
「お、親父」
八人のギャングに囲まれた俺は急に肩の力が抜けた。親父が笑っている。俺も笑えた。俺の死に場所はここじゃないんだ。目の前にはまだ曲がりくねった一本道が続いていて、地平線のその先に消え入ってしまうほどに伸びてたのだ。
「弱い者イジメは辞めなさい」
親父の第一声に、俺の笑顔は歪んだ。
「こいつはな、俺のすねをかじって温々と大学生活を送ったあげく、何も得ることのなかった大馬鹿野郎なんだ」
俺を取り囲むギャング達は、一斉に眉をひそめた。
「これ以上、こいつに金を使うのはウンザリなんだよ」
親父は次第に声のトーンをあげ、肩にかけていた鉄パイプを地面に突き立てた。あまりに鉄パイプが長いためか、足元がふらついていた。もう若くはないんだな。
「だから助けに来た」
ギャングどもは縄で結ばれた俺を突き倒し、親父に向き合った。
途端、親父は猛烈な勢いで大きく鉄パイプを振り回した。ギャングどもを一気になぎ倒しにかかったのだ。地面に倒れた俺の上で、轟音をたてながら長い鉄パイプが風を切る。そして、サボテン四兄弟が、ブルース四兄弟が、次々と海に転落していった。
「嗚呼、ゲバルト」
親父は訳の分からない言葉を呟くと、体勢を崩して膝を突いた。
俺は身をよじって縄を解くと、とっさに駆け寄って、親父を抱えあげた。思いのほか軽い体を尻から三輪自転車の荷台に突っ込むと、鉄パイプを拾い上げ、ペダルを漕ぎ出した。
倉庫の並んだ港湾を、しばらく全力で漕ぎ続けた。ジグザグに角を曲がって奴らをまくと、息を切らせながら速度を緩めた。
親父に聞きたいことがいくつもある。俺は紫に染まった空を斜めに見上げ、息を整えた。
「なぁ、あの電話、俺だって分かってたのか？」
親父はしばらく間をおいてから答えた。
「お前、俺のことを親父と呼ぶくせに、母さんのことは母さんと呼ぶだろう」
「あぁ、そうね。なに？ 気にしてるの？」
「差別だろ」

夕空に俺の乾いた笑いが響いた。
親父が現れたとき、俺はなんであんなに安心できたのか。馬鹿みたいな姿を見せられて、「死」という概念が吹き飛んだ。それもあったろうが、そんなものを抜きにしたって、俺は親父を目の前にして、自分が先に死ぬとは思えなかったのだ。
「どうやって俺の居場所が分かったんだよ？」
「さあな。鼻が利いたんだろ」
「そ、そんなんでいいのか？ 俺を見かけた奴がいたとか、実は携帯ＧＰＳで監視してたとか、そんなんじゃないのか？」
「携帯なんだって？ 俺は財布とカイロしか携帯していないぞ」
アボリジニーは教育によって帰巣本能をなくした。親父はこの場に必要とは思えない知識を披露した。
「メールは使えたんだな」
「馬鹿言うな。多少パソコンぐらい使えなきゃ仕事にならん」
「でも、あれ何だったのよ。顔文字？」
「泣き顔の逆立ち。泣くなって意味だ。俺オリジナル」
「通じなきゃ意味ないだろ」
「いいだろ。とにかく、俺は母さんと約束したんだよ」
母さんが死んじまってから、俺は少しだけ広くなった公団の一室で、親父と二人暮らしになった。顔を合わすことはあっても、こんなに話をすることは滅多にない。
「だから、面倒なことにお前を守らなきゃならん」
荷台に尻を突っ込んだ親父は、一体どんな顔してそんな話をしているのか。両親の想いに多少の感慨を覚えたところで、必ず聞かれるであろうが、あまり聞かれたくなかった問いかけが投げられた。
「ところで、お前は何をしたんだ？」
俺は、余裕を見せるべく、なるべく言葉に抑揚をつけずにゆっくりと答えた。
「ちょっかいだした娘が、あんまり穏やかな家柄ではなかったんだよね」
もうじき港湾を抜けようというところで、通りから三台の黒塗りセダンが現れた。進路が塞がれ、俺はブレーキを握るほかない。運転席から若い男が小走りに後部座席へ廻ると、中から真っ白なスーツを身を纏った恰幅のいい男と若い娘が現れた。
親父が荷台から首を伸ばす。
「なんだありゃ？ 親分か？」
娘は男に腕を絡め、もう一方の手で俺を指さした。
「可愛い娘じゃないか」
俺は彼女と目を合わせると、自分の鼻を指さして、口元を歪めた。
「そういや、母さん、もう一つ言ってたぞ。あんまりお前のプライベートには首を突っ込むなって」
親父は荷台から飛び降り、俺から鉄パイプを奪い取った。すると、そいつをバーベルのように両手で持ち上げるなり、いきなり親分どもに投げつけた。
俺は目を丸めて絶句した。
「後はどうにかしろ」

親父は、俺にヘルメットを被せると、いきなりサドルから突き落とした。そして、颯爽と三輪自転車に跨り、紫色に染まった港湾に長い陰を引きずりながら逃げ去っていった。

宍戸ワッツ・アップ？

「こういう時はやっぱ金だろ」
郵便局の記載台で、宍戸は随分と楽しそうに振替用紙を記入していた。
「この後、献血でも行っちゃう？」
俺は、苦笑いを浮かべて、二、三度頷いた。これが高校生くらいの青少年だったら、微笑ましく、周囲の大人も感慨深げに頷いただろう。しかし、俺たちは三〇歳も過ぎたオッサン二人組である。募金ぐらい興奮せず静かに進めてもらいたい。

二〇一一年三月一一日金曜日。奇しくも、息子の三歳になる誕生日だった。翌日が休みということもあり、俺は有給休暇をとって、家族みんなで過ごすことにしていた。
その朝、息子を襖の前に立たせて、何度もシャッターを切っていると、宍戸からのメールが届いた。
息子君ハッピーバースデイ！
いい加減、名前ぐらい覚えてくれ。
俺はお決まりの返信を送り、たくさんの写真から目線が外れているものを削除していった。
記念撮影ではない。今年こそ海外旅行したいと、かねてより細君が言い続けていたため、息子の誕生日に家族三人でパスポートを取得することにしていた。
そこで厄介なのは、幼い息子の写真を撮ることである。スピード写真で撮ることははじめから諦めていた。インターネットでパスポート取得について調べると、写真紙に印刷すれば、デジカメ撮影でもいいとのことだ。
それらしく撮れた写真をパソコンに転送し、三五Ｘ四五ミリメートルに顔いっぱいが収まるよう加工して、写真紙にプリントアウトした。
「上出来っ」
思いのほかうまくできたことに気をよくし、自分たちの分も撮影することにした。
「外で撮ったら、七〇〇円はするだろ」
「そんなにする？ 四〇〇円くらいじゃなかったっけ？」
必要書類を確認にして、横浜のパスポートセンターへ出発した。その場所は日本大通

り駅より徒歩五分とのことだった。こんなところに日本大学のキャンパスがあるのかと首を傾げたが、みなとみらい線に乗り込めば、それは、ニホンダイドオリではなく、ニホンオオドオリであった。日本大通りとは、横浜の埠頭からのびる西洋式街路で、開港当時は物資や人々が行き交うメインストリートであったそうだ。

改札を抜けると、すぐにスピード写真が設置されていた。

「やっぱり七〇〇円だよ」

パスポートセンターが近いからだろうか。少し歩けば、また同じような機械が設置されていた。

「こっちは四〇〇円よ」

この差は何かと首を傾げた。短くても五年は残る代物だ。三〇〇円の差で涙を呑みたくないと思ったが、そもそも、あり合わせで間に合わせたのだから何も言えまい。

パスポートセンターは、平日にも関わらず、随分と多くの人がいて驚いた。滅多に海外旅行などしない俺にとって、パスポートの申請など、随分とレアなイベントであったからだ。

整理券を引き抜いて、ジッとしていられない息子を野放しにした。最近、数字に興味があるようで、カウンターに掲げられた番号を指さしながら、端から順番に「一」、「二」と数えていった。数字を読み上げる度、当たっているのか俺に確認する。その度、俺も「一」、「二」と復唱した。

やがて順番が呼ばれ、電光掲示板に整理券と同じ番号が表示された。彼女をカウンターに座らせ、俺は息子を抱えて背後から見守った。手際よく書類の確認が進む。そして、写真のチェックに差し掛かると、ベテランの趣を感じさせる職員は、虫眼鏡を取り出した。

「こちら、ご家庭で撮影されましたか？」

彼女は一度俺のほうに振り返ってから、恐る恐る頷いた。職員は写真を一枚ずつ丹念に眺めていった。

「襖かなにかの前で撮ってますかね？」

彼女は再び頷いた。数百円の写真代をケチったことを、責められているような気分になってきた。

「ちょっと紙っぽい柄が出てしまうかも知れませんが、まあ、問題ないでしょう」

職員は虫眼鏡を下ろすと、微笑みながら言った。

「写真、上手ですね」

俺の気分は一気に晴れ上がった。

「彼が撮ったんです」

ホッとした様子で、彼女が職員に告げる。俺はいたく満足な気分でパスポート申請を終えた。

昼飯はファミリーレストランと決めていた。その名称に相応しく、小さな子供がいる家庭にとっては、なにかとリーズナブルである。背の高い子供椅子が用意されていることはもちろん、ご飯の大盛りが無料、そして、子供分のドリンクバー（スープ含）が無料である。

俺は、渋好みな息子の嗜好にあわせ、カレイの煮付け定食をご飯大盛りで注文した。

「子供のドリンクバーは？」
　念のため確認する。ウェイトレスは誇らしげに「無料です」と答え、俺は望まれてもいない微笑みを返した。
　食事が届くと、俺は子供用のプラ皿に、大盛りご飯の大盛り分をよそって、骨を除いた煮魚を盛りつけた。息子はスプーンを握った右手と、本来、器を押さえるべき左手を駆使して、口の中へと食事を運んでいった。
　腹が満たされたところで、特別にドリンクバーの抹茶ミルクを二杯。もちろん、それが誕生日プレゼントというわけではない。本当のプレゼントは家に隠してあるのだ。
　満腹になると、眠りそうな気配があった。子供の昼寝ほど嬉しい時間もない。彼女にはこの辺りに来ると必ず立ち寄る手芸店があった。俺は、彼女を買い物に行かせ、飲み放題のコーヒーでも嗜むつもりだった。
　彼女がそっとレストランを後にすると、想定外の事態が起きた。
　息子が眠らない。母親がいなくなったことに不安を覚えたのか、急に目を覚ましてしまったのだ。すると、もうジッとはしていられない。ゆっくりコーヒーなど飲めるわけもなく、諦めてレストランを後にした。
　通りを挟んだ向かいは山下公園だ。息子を野放しにすると、やることは決まっている。船を指さす。「ヨット！」と叫ぶ。散歩中の犬に挨拶する。後ずさる。そして、鳩を追いかける。カモメを追い払う。
　一通りのイベントを終えると、公園の隅に設置されたレストハウスに足を運んだ。
　店内には子供が遊べる設備がある。三歳になったばかりの息子にはやや難易度の高いアスレチックだ。それでも、靴を脱がせてやると果敢によじ登ろうとしはじめた。そこには一〇人ばかりの子供たちが戯れており、なかには同じ歳くらいの子供もいた。言葉にならない奇声を上げて笑みを交わしている。来月にも幼稚園がはじまる。子供どうしで笑い合う姿をみると、うまくやっていけそうだと、ホッとさせられる。
　そして、一四時四六分。
「地震っ」
　どこかの親御さんが声を上げて、アスレチックで遊ぶ我が子に飛びついた。俺も慌てて息子を抱え、脱がせた靴を拾い上げた。落ち着いた様子の店員がドアを開放すると、みんな一斉に外に飛び出した。海に面した公園が、まるで船の甲板のように揺れている。今まで経験のない大きな揺れだった。そして、長い。俺は息子を抱えたままその場にしゃがみ込んだ。こんなところでは津波が来るのではないかと沖を眺めた。続いて、彼女のことを思い出した。息子を強く抱き寄せ、「大丈夫」と呟いた。
　しばらくして揺れがおさまると、はじめに海から離れようと考えた。公園の出口を目指しながら携帯電話を握る。彼女と連絡をとろうとするが、一回目、電話が繋がらない。そして、二回目で電話は繋がった。今になって思えば、奇跡的なタイミングだ。居場所を尋ねると、ファミリーレストランに戻ったという。俺は山下公園にいることを伝え、パスポートセンターが入っている産業貿易センタービルの前で落ち合うことにした。
　彼女は眉を垂らして情けない顔になりながらも、手芸店内での騒動や、店の前で立体駐車場が大きく揺れていた様子などを興奮気味に話した。そして、買い物かごを放置したまま飛び出してきたとのことで、まず、買い物を済ますため手芸店に戻ることにした。

午後は、乗り物が好きな息子のため、桜木町の「みなとみらい技術館」に連れていく予定だった。横浜ランドマークタワーのすぐ隣だ。これだけの地震があった後では、地下鉄を使うになれず、桜木町まで歩くことにした。そこまで辿り着けば、自宅に電車一本で帰ることができた。山下町からでもランドマークタワーは随分と大きく見える。その姿がとても逞しく思え、あそこにたどり着ければ何とでもなるような気がした。

水町通りを抜けると、「開港広場」という噴水公園がある。ここは日米和親条約締結の地であり、すぐとなりには横浜開港資料館がある。掲示板には、なんとも気になるポスターが貼られていた。そこには顰めっ面で頬を押さえるご婦人が描かれている。「痛っ歯が痛い―歯科医学の誕生と横浜―」という企画展だそうだ。いい味を出している婦人画に目を奪われていると、再び大きな揺れが襲った。俺たちは小走りで広場に戻り、その場にしゃがみ込んだ。

「見てあれ」と、彼女が声を上げた。

怖がりほど、怖いものがよく目につく。通りを挟んで向かいのビルが大きく揺れていた。木材よりも竹のほうが折れにくい。近年の高層建築は、少し揺れやすくできていると聞く。

しゃがみ込む人、オブジェに捕まって耐える人、広場は大きくどよめいた。そんな中でも、道路には多くの車が走っていた。彼らは気づいていないのだろうか。

揺れが収まると、俺たちは少しピッチを上げて歩き出した。とにかく、ランドマークタワーを目指そう。

途中、オフィスビルの外で、ヘルメットを被ったスーツ姿の集団が集まっていた。地震でビルの外に非難したのだろう。そこで、今日が平日であることを思い出し、会社のみんなはどうしているのだろうかと、少々気がかりになった。

息子のお尻を抱えていた腕が不意に温かくなった。慌てて腕を抜いたが、袖が濡れた様子はない。それでも、オムツが破裂しそうなほどに膨らんでいた。すぐにでもオムツ替えをしたいところだ。前方を見渡すと、みなとみらい線のロゴが見えていた。「馬車道」駅への入り口だった。

駅のトイレを拝借しようと、小走りに階段を下ったところ、アナウンスが流れた。

「津波の恐れがあるため、駅構内に立ち入らないでください」

俺は彼女と顔を見合わせ、慌てて階段を引き返した。なにはともあれ、ランドマークタワーだ。なんだか、あそこに辿り着くことが全てのゴールのように思えてきた。

山下町から三〇分程度歩いたろうか。ようやくゴールイン。そして、なにより多目的トイレへ走った。無事、オムツ交換を終えたところで、ホッと一息、ベンチに落ち着くことができた。

館内では、電車が全線が停まっているとのアナウンスが流れていた。大きな地震だったから無理もないだろう。しかし、山下町からここまで歩いてきた限りでは、たいして被害があるようには見えなかった。

「動くかなぁ？」

彼女の心配を他処に、俺はすぐに動き出すだろうと高をくくっていた。

「震源って何処だったんだろうな？ 結構、やばかったんじゃないか？」

彼女の携帯電話は比較的新しい機種で、俺の骨董品とは違いワンセグ機能がついていた。とはいっても、ほとんど使ったことがない。四苦八苦したあげくに、どうにか受信すると、そこではじめて東北や茨城の状況を知った。それでも、未だ被害状況は明確ではなく、小さな画面から読みとる限りでは、事の重大さが十分に理解できていなかった。

息子の気まぐれにつき合いながら、館内をしばらく散歩した。平日のランドマークタワーに来るのははじめてだった。人が多い割に、大半の店が閉まっている。平日はこんなものか。それとも、地震の影響なのだろうか。

二人とも博物館に行こうとは言い出さなかった。恐らく閉館しているだろうし、開いていても危険だろう。それに、少し疲れていたせいもあった。

日が暮れはじめ、混雑を懸念して、早めに夕食を取ることにした。意志表示が十分にできない息子だが、誕生日というもこともあり、何を食べたいか聞いてみる。

「うどん食びよ」

本当にうどんでいいのかと訝りながらも、リクエストに従ってうどん屋を探た。しかし、残念ながら蕎麦屋しか見つけられなかった。そこは以前にも入ったことのある店だった。品のいい蕎麦屋にしてはボリュームがあって満足度が高い。メニューには、美味そうなだし巻き卵の写真が載せられていた。卵好きな息子にはこれと決まった。あとは俺の蕎麦を分けてあげればいいだろう。

うどんを食べたいと言っていた息子だったが、文句一つ無く、だし巻き卵と蕎麦を口に運んでいった。満足そうではあったが、子供の誕生日に蕎麦屋とは少々味気ない。夕食後には、タルトケーキで有名な喫茶に行くことにした。

パスタなどの食事もとれる店であり、夕食時でも混み合っていた。二組ほど順番を待ってからテーブルに着いた。息子にはチョコレートケーキと決まっている。さらに、二人分の飲み物を注文した。彼女は抜かりなく、店頭に誕生日用の蝋燭が売られていることに気づいていた。

「蝋燭三本たてられます？」

「誕生日ですか？ お名前も入れられますが」

ウエイトレスは満面の営業スマイルを浮かべていた。辺りを見回しても、震災の影は見られず、彼女の笑顔にも特に違和感はなかった。

やがて届いたチョコレートタルトは、水色の細い蝋燭が三本立ち、大きな白い皿の中央にポツンと盛られていた。そして、その周囲には、ストロベリーソースで息子の名前と「Happy Birthday」の文字が描かれていた。

「誕生日おめでとう」

こちらが拍手をすれば、息子も満面の笑みで手を叩いた。デジタルカメラで、懸命に蝋燭を吹き消そうとする姿をムービー撮影していると、横から彼女が火を吹き消した。

蝋燭を抜き取って、フォークを握らせる。息子は器用に上から順にすくうようにして、口に運んでいった。しかし、タルトが皿の上で滑ってしまい、皿に書かれたメッセージはすぐに掻き消された。

堅いタルトの部分はお気に召さなかったようだ。俺は少しずつ摘みながら口に運んだ。館内アナウンスによると、まだ電車が動いていない。そして、五階のイベントスペースを休憩場所として解放するとのことだった。

俺たちは、少々不安になりはじめた。
「まだ停まってるって」
「今日中に電車は動くんだろか？」
「ウチの方まで、バスってあったっけ？」
電車が動いていないのはよく分かった。しかし、ここにいても今日中に帰れるのか分からない。食事とデザートを終え、体は十分に温まっていた。
「とにかく、駅まで行ってみよう」
息子を抱え上げ、強い風の吹くビルの外に出ることにした。
桜木町の駅前まではムービングウォークが続いているが、地震の影響か、全く動いていなかった。寒い中でも息子の機嫌は良く、真っ直ぐに延びる道を見ると、「歩ける」と言いだした。フラフラと駆けていくその背中を追いかけながら、俺たちは駅前へ向かった。
ロータリーでは、どのバス乗り場にも長い行列ができていた。自宅の近くまで行ける路線があったとしても、とても乗れる様子ではなかった。案内板の前では、職員の男性が眉を垂らしながら声を上げていた。
「バスがいつ来るかは分かりません」
要するに、乗ってくれるなというメッセージだ。俺は息子の背中をつつき、駅のほうまで走るよう促した。
途中、レンタカー屋の看板が見えた。これなら、タクシーで帰るより、ホテルに泊まるより安上がりかもしれない。
「車を借りて、明日また返しに来てもいいよね」
それでも、電車で帰れるならば、それに越したことはない。ひとまず駅へ向かうことにした。地下鉄の改札には大勢の人が集まっていた。そして、最も知りたかったことが、最も聞きたくない内容でアナウンスされていた。
「今日中に電車が動く可能性は極めて低いです」
続いて、パシフィコ横浜が緊急避難所になっていると伝えた。要するに、諦めて避難所へ向かえというメッセージだ。子供を抱えて、途方に暮れていると、見知らぬ女性が声をかけてきた。
「ここのビルを管理している者です。小さなお子さんのために、避難場所を提供することにしましたが、いかがですか？」
親切心で声を掛けてくれたものと信じよう。しかし、大人は受け入れないとのことだ。子供たちだけで遊びに来た小中学生ならばありがたいだろうが、まだオムツも取れていない子供を一人で預けるわけにはいかない。
「もう少し、帰る方法を考えてみます」と、彼女は答えた。
「そうですか。この辺にいますから、いつでも声を掛けてください」
俺たちは小さく頭を下げて、その場を後にした。
最後の望みはレンタカーだったが、既に一台もないとのことだった。誰しも考えることは同じなのだろう。そこで、俺は決断した。
「パシフィコに泊まろう」
彼女は反対せず頷いた。

外泊となれば、必要なものを揃えなくてはならない。オムツが足りない。お尻拭きやポケットティシューも必要だろう。俺たちはドラッグストアを探し、それらを購入した。同じ店で軽食を購入することもできたが、どうも薬屋で飲食物を購入することに抵抗感がある。軽食は避難所へ向かう途中、コンビニで購入することにした。

それが失敗だった。避難所に向かうにつれて、同じ方向へ流れる人が増えていく。そして、途中のコンビニは缶詰状態だった。とても子連れで店に入る気になれず、彼女一人が勇んで店内へと突入していった。

息子を追いかけ回しながら店の外で待っていると、やがて、疲れた様子の彼女が戻ってきた。

「お茶とチョコレートしか買えなかったよ。おにぎりとか、みんな売り切れ」

夕飯を早めに済ませておいて良かった。一晩だけのことだ。多少の飲み物があれば凌ぐことはできるだろう。

パシフィコ横浜に到着すると、北側の方へと人の流れが誘導されていた。一番奥のアネックスホールが避難場所のようだ。椅子と長テーブルが並べられた多目的室には、既に多くの人で埋め尽くされていた。外の廊下にも人が溢れ出し、みんな地べたに腰を下ろしている。どうせ夜になったら横になるのだろうと、俺たちも廊下の隅にスペースを見つけ、地べたに座ることにした。

辺りには、俺たちのような家族連れのほか、スーツ姿のビネスマン、トランクを引きずった旅行客、学生の集団など、金曜日の夜ということもあって、様々な人たちの姿があった。

避難民と呼ぶほどの悲惨さはなく、皆、落ち着いた様子だった。男女は肩を寄せ合い、仕事上がりのビジネスマンはワンカップ片手に談笑していた。女子中学生の集団に至っては、どこからか探してきたパーティションで、自分たちだけの空間を区切り、修学旅行さながらに騒いでいた。

夜が更けると寒さは増したが、空調はなされており、イベント施設だけあって、トイレや授乳室などの設備も充実していた。家族三人で環境の整った避難所にいられたことは、不安を抱えながら家にいるよりも良かったかもしれない。

二三時を過ぎたころ、避難所のスタッフより、一部の列車が動き出したと情報が流れた。館内がざわめき、帰り支度をはじめる者も出はじめた。

その時、思わぬ優しさに触れた。

「ジュースとお菓子いりますか？」

帰りがけの若者が、俺たちの前に立ち止まって、紙パックのジュースと開封済みのチョコレート菓子を差し出してきたのだ。彼女の視線は、息子に向いている。小さい子供を気遣ってのことだろう。普段より、親切は断らないことにしている。

「お帰りですか？ ありがとうございます。とても助かります」

若者の優しさに触れる出来事は、これだけではなかった。

深夜になると毛布の支給があった。俺たちはしばらくそれに気がつかず、第一便の毛布を受け取ることができなかった。第二便の予定はあるそうだが、道路の混雑で、いつになるかは分からないとのことだった。

はじめに彼女が長い列に並んでいた。俺は息子を寝かそうと、コートに包んで抱えて

いたが、どうもうまく寝付けないようだ。腕の中で藻掻き続け、ついに泣き出してしまった。周囲の心配そうな視線が集まる。俺は行列の彼女に歩み寄り、息子の世話を交代した。こんなところで慣れないことをするモンじゃない。普段から寝かしつけるのは彼女の役割なのだ。

間もなく、遠くに聞こえていた息子の泣き声は止んだ。どうにか眠れたようだ。それでも、いつ来るか分からない毛布を待ち続けていると、彼女が一人で小走りに駆け寄ってきた。

「どうした？」

「男の子が毛布を貸してくれたよ。あの子は毛布に包んで寝かしてある」

一緒に、お菓子も分けてくれたという。

息子の毛布さえ手に入れば、自分たちはどうにでもなる。しかし、毛布を与えてくれた若者も寒いだろう。俺はやはり毛布を待つことにした。その間に、ペットボトルの水や、たくさんの蜜柑が届けられた。たった一晩の避難で、これだけの支援物資が届くことに驚かされた。

毛布を手にした時には、深夜二時をまわっていた。ようやく若者に毛布を返すことができ、俺たちも安心して眠りについた。

三時間くらい眠ると、寒くて目が覚めた。毛布をかけていても床が冷たい。とても長い時間は眠れなかった。それでも、眠気はいくらか引いていた。もう起きているほうが楽だろう。

トイレに向かうと、同じように眠れず起きていた人たちが、みんな同じ新聞を読んでいた。一面には大きい見出しで、「東北、関東巨大地震」と書かれている。

トイレを出ると、神奈川新聞が配布されていた。号外かと思えば、しっかりした朝刊だ。なんて行き届いた支援だろう。俺は彼女と息子が眠る場所まで戻って新聞を広げた。そこで、震災の全体像をはじめて知ることになる。大写しになった悲惨な状況が並び、記事の内容はまるで頭に入らなかった。

新聞を捲る音で、彼女が目を覚ました。

「眠れた？」

彼女はまだ眠そうな眼をして無言で頷いた。

次第に、みんな活動を再開しはじめた。始発で帰ろうという人は、夜も明けないうちに避難所を後にした。やがて薄明かりが差し込んでくると、息子が起きてきた。

「おはよう」

笑顔を向ければ、満面の笑みが返ってくる。まったく強い子だ。愛おしい姿に両手を伸ばし、そっと抱え寄せた。お尻の下に腕を通せばオムツが異様に膨れている。途端、俺は顔をしかめた。

オムツ替えのため、授乳室へと向かった。小さくノックし、何も返答がないことを確認して扉を開くと、高校生くらいの女子集団が屯していた。まさか母親という訳ではないだろう。

「入ってもいいですか？」

更衣室を覗いてしまったような気まずさを感じたが、オムツのとれていない子供を抱えた俺が遠慮する場ではない。

「オムツですか？ どうぞ」
　一人がボソリと呟き、俺は毛布の散らかった女子部屋に突入した。オムツ台に息子を寝かせて、オムツ替えをはじめる。疲れていたのか、それとも、招かざるオッサンがいるためか、皆、一様に無言を通していた。何だかプレッシャーを感じ、思わず手際が良くなる。俺はＦ１のピットクルー並のスピードでオムツを交換し、再び息子を抱え上げた。
　失礼しました。こんなところで屯するなよ。暖かくていいところ見つけたね。なんと言って部屋を後にすべきか考えあぐね、結局、無言で部屋を後にした。
　子供は朝から元気だ。避難所を縦横無尽に歩き回るものだから、まだ眠っている人を蹴っ飛ばしはしないだろうかと冷や冷やする。起きている人々は疲れているだろうに、息子に優しい笑顔を届けてくれた。
「帰ろうか」
　十分に陽が昇ったところで、俺たちはその場を離れることにした。回収場所に毛布を積み上げ、避難所を支えてくれたスタッフの方々に礼を述べる。若者たちの優しさと救援物資でいっぱいになってしまった袋を下げて、避難所を後にした。
　外の風はとても冷たかった。寒くて眠れないと思っていた避難所は、随分と暖かかったようだ。
　さあ、家に帰ろう。一日遅れの誕生日プレゼントを渡さなくては。

　宍戸は支払いを終えると、満足げな表情で郵便局を後にした。
「お陰で募金ができたよ」
「俺も、お前のお陰だよ」
　金を出したのは俺だが、入金したのは宍戸だ。募金しようかとボンヤリ言いだしたのは俺だったが、奴に尻を蹴られてようやく実行できたのだ。
　情けない話だが、阪神の時はまるで実感のない遠くの話だった。今回は、多少なりとも影響を被ったから、募金する気になれたのだろう。たくさんの優しさに触れたせいもある。
「よし、じゃぁ、献血してから呑み行くぞ」
　俺たちには行きつけの居酒屋がある。朗らかな店長の恵比寿顔が浮かんだ。
「血を抜いてから呑んだら、ぶっ倒れそうだな」
　献血などしたことがないから、正直なところ、どうなるのか知らない。歯の治療みたいに、直後の飲食は許されないものだろうか。また、少々億劫でもあった。献血も、呑みに行くのも。
「どうなんだろうな。知らんよ」
　宍戸も献血初心者のようだ。
「どっちにしろ、俺は酒など飲まないけどな」
　奴は普段から酒を飲まない。店長の恵比寿顔と牛筋煮込みが目的だ。確かにあそこの牛筋煮込みはうまい。できることなら、被災地のみんなに湯気の立つ煮込みを腹いっぱい食わせてやりたいものだ。
「今、お前が何を考えているか分かるぞ」
　俺の思考はいつだって単純だ。

「嫁さんに、何て言って飲みに行こうかって思ったろ」
「そんなことは思っとらん」
　俺は、苦笑いを浮かべる。が、確かにそれも問題だ。献血したほうが、言い訳が効きそうな気もする。
「献血した後の牛筋煮込みは、血の補給に良さそうだな」
　俺が言うと、宍戸は深く頷いた。そして、俺たちは駅前の献血車へと向かった。

オントロギー・ポップ

　あっているのか定かでない柱時計を眺めて、カウントダウンする。
「三、二、一」
　そして、年が明けた。
　大きなくしゃみとともに布団から起きあがり、窓を開けて新春の空気を取り入れた。耳を澄ませても除夜の鐘は届かず、なんの実感も感慨もない。それでも、鼻水を啜り上げて呟いた。
「明けましておめでとうございます」
　マンションの前を貫く街道は、役所通りと呼ばれている。その名の通り、区役所だの、消防署だの、郵便局だの、警察署だのがずらり配置されおり、生活には便利であろうと思われた。故郷を遠くに残してここに住み着いてから、新興の街であることを知った。キラキラと瞳を輝かせた若夫婦が、幼子の手を引いて闊歩する。少子化という言葉とはまったく無縁な生命力に溢れる街だ。独り身の俺にとって、その頬笑ましい光景は、それ以上に疎ましいものであった。
　フッ、ハッ
　通りから掛け声のようなものが聞こえた。何かと思えば、大晦日に一人、長髪を振り乱しながら盆踊りを踊る青年がいる。二メートルはあろうかという長身の男だ。俺と同じような思いを抱いているのだろう。気がふれて踊らずにはいられなくなったのだろう。

　悪い癖だ。他人の言動に勝手な意味を付けて、理解した気になる。自分のいいように妄想することで、安心感を得たいのだ。
　夜風に吹かれていると、身体の熱はすっかり奪われた。いつまでも真冬の盆踊りを見ているのも辛い。俺は窓を閉めた。青年は踊り続け、ヒョイと両手を突き出し、斜め四五度に天を仰いだ。瞬間、目が合ったような気がした。五階から見ても、その血走った目は尋常ではない様相を呈している。俺は気味が悪くなり、カーテンを閉めた。

部屋の中が静まると、不意に孤独感に襲われた。俺は布団に倒れ込む。そして、自分の体臭が染み込んだシーツに顔を埋め、鼻から深く息を吸い込んだ。いくらか気持ちが休まる。反面、そんな自分に嫌気がさす。俺は仰向けに向き直り、大の字になった。そして、溢れ出そうになる涙を必死にこらえた。

年末に熱を出し、それ以来、一人で氷枕を用意し、一人で検温し、一人で粥を拵え、そして、病知らずのガン細胞でできた下半身を、これまた一人で慰めてきた。

マリーさんは今頃なにしているだろうか。俺は玄関に目を向けた。ドアベルが鳴り響き、真っ赤な事務服のマリーさんが現れる。俺は妄想力を発揮し、下半身に力を込めた。

が、うまいこといかない。盆踊り男の強烈な印象が瞼に張り付いて剥がれない。俺は、頭を振って懸命にマリーさんを思い出す。マリーさんこと茉莉さん。俺の勤める事務所で受付嬢をこなす派遣社員。何故、彼女が看病に現れる（妄想を抱く）のか。それは、彼女に惚れているからである。嘘です。そうでもない。衰弱した心身は慰みを求めている。

俺のガン分子は訴える。歳のころは二五歳から三二、三歳。あまり若すぎるのはよろしくない。衰弱した心身には、エナジー漲る若人は堪える。さらに言えば、美人に越したことはない。もっと言えば、人形のように無機的な美しさではなく、不意に見せる笑みに秘めた美しさをもった女性がベターだ。

妄想だけなら誰の迷惑になるわけでもなかろうと、理想の女性像に思いを馳せる。しかし、困ったことに女性との接点が乏しいがため、その姿は欲望の黒霧に霞んでいる。俺の脳味噌にインプットされた女性像など、未だブラウン管のテレビジョンを通じて得た情報に過ぎず、三流タレントの顔ばかりが浮かんでは消える。

妄想力の酷使にこめかみ辺りが疲労し、次第にどうでもよくなってきた頃、ようやく辿り着いた最も身近なリアル。それがマリーさんだった。歳のころは理想のレンジに収まっていたと記憶する。美人かといえば――確かにいい人であるよ。嗚呼、何たる卑劣漢。

もっとも、俺はただ妄想するだけ。発信はしない。観測者もいない。これでは存在しないと同じだろう。俺だけが唯一、この重苦しい肉体に押し潰されそうになりながら、己の存在を強く認識している。

病もされど、俺を卑劣にするのはこの街なのだ。平和そのものであるこの街が、俺を惨めな気持ちにさせ、病がそれを助長する。それでも、今は病んでいたい。重苦しい肉体こそ諸悪の根元であれ。でないと、俺は救われない。

心身が疲弊すると腹が減ってきた。俺は涙を拭って重たい体を起こす。今朝拵えた粥は既に糊状になっていた。構わず鍋を火にかけると、コトコトと音を立てはじめた。米の臭いが立ちのぼり、俺は猛烈に腹が減ってきた。茶碗に粥を盛って、茶箪笥から「萩・井上のソフトふりかけ紫蘇若布」と煎りゴマを取り出す。こいつを半々にふりかけた粥は、適度な塩分と香ばしさで、いくらでも食える。

粥を口に運ぶと、欲深い身体はもっと血肉になるものを欲しはじめた。確か、冷蔵庫にはソーセージがあったはずだ。

「いかん、いかん、いかん」

俺は首を振った。身体は明らかに回復傾向にある。もっと病んでいたいのに、己の治癒能力が恨めしい。俺は箸を下ろして浴室に向かった。そして、寝間着を全て脱ぎ去ると、絶叫とともに冷水シャワーを浴びた。
「寒ぅ。いや、マジ寒ぅ」
俺は耐えきれず、すぐに浴室を飛び出した。そして、一週間洗わずに吊り下げられれたままのバスタオルに手を伸だした。免疫力の弱っている身体を包めば、たちまち風邪が悪化しそうな代物だ。念のため鼻孔を近づける。致死レベルではなさそうだ。
バスタオルを被ってしばらくうずくまっていると、ドアベルが鳴った。
マリーさん？ 訳ない。マリーさん？ はずない。マリーさん？ 突拍子もない。俺の脳味噌は舞い上がり、慌てて寝間着を身につけた。そして、ドア越しに二度ほど咳をしてから、ノブに手をかけた。
ドアノブを捻ると、突然、大きな勢いでドアが引っ張られた。目の前には、男の胸板。

「助けに来た。大丈夫か？」
見上げれば、目を血張らせた長髪の大男。先ほどの盆踊りの青年だ。
「な、何だ君？ 助けに来た。のか？」
「そうだ。大丈夫なのか？ さっき絶叫が聞こえたが」
青年は肩を揺らして息を切らせている。五階まで駆け上がってきたというのだろうか。

「大丈夫だが」
俺が答えると、青年は安心したように目を閉じて口元を綻ばせた。
「そうか。ならいいんだ」
目を閉じていれば、スラリと背が高く、なかなか見栄えのいい青年だ。しかし、再び血走った目を見開いて、不気味に微笑んだ。俺は身構える。続いて、思いがけぬ言葉が飛び出した。
「明けましておめでとうございます」
俺も反射的に答えた。
「明けましておめでとうございます」
そして、青年は大きな体で軽やかに階段を駆け下りていった。俺はその背中を呆然と見送った。
「とってもいい奴だったな」
俺は青年に突き動かされたように風呂へと駆け戻り、再びクタクタになった寝間着を脱ぎ捨てた。
空の浴槽に身を沈め、蛇口を命一杯に開いて湯を注いだ。尻はすぐに温まるが、肩まで湯が浸かるには随分と時間がかかる。俺は両足を突き上げて、浅い湯船に無理矢理上半身を沈めた。肩まで湯が浸かると、冷え切った身体に熱が馴染んでいく。溜息が出た。湯面の上昇にあわせて、俺は浴槽に背中を擦りながら上体を起こしていく。やがて湯が満ち、蛇口を閉めた。
とにかく、ゆっくり熱い湯に浸かって体を温めよう。汗腺を開いて腐りきった根性を絞り出すのだ。全身に石鹸を擦り付ければ、真っ黒な泡が立つだろう。熱いシャワーで

洗い流して、おろし立ての大きなバスタオルで体を包もう。新しい下着と寝間着に着替たら、少し焦げ目が付くくらいにソーセージを焼こう。多少のアルコールを取るのもいいだろう。そして、少し眠ろう。初日の出までになんとか身軽な体を取り戻すのだ。

スーサイド・マシン

駅前広場のベンチに腰を下ろして、空を見上げた。星がよく見える肌寒い夜だ。目の前のあれなんかは俺だって知っている。オリオン座だろ。

今日もまた終電だった。家に帰ったところで女房と子供は既に夢の中。真っ直ぐ帰ろうが、ベンチで一休みしようが、大きな違いはない。俺だって家に帰ればビールを煽って眠るだけだ。不満があるわけではない。同じ呑むなら夜風にあたりながらもいいだろう。俺はコンビニ袋から缶ビールを取り出し、プルタブを響かせた。

年度末のこの時期となれば、いたるところで予算消化の道路工事が行われている。終電過ぎの駅前広場にもアスファルトを叩く音が響きわたり、静かな星空の下で一杯とはいかなかった。

騒音の中、聞き慣れない金属音が耳についた。ビールを煽りながら眉をひそめる。これは本当に道路工事だろうか。カシャンカシャンというその音は、一定のリズムで近づいてくるようだった。何事かと視線を向ければ、俺の隣にブリキのロボットが立っていた。オズの魔法使いで見たようなそれだ。彼（？）は小さく会釈して、ベンチに腰を下ろした。俺は唖然とし、缶ビールを握る手を滑らせた。

「落チマシタヨ」

彼（？）は伸縮自在な右腕を瞬時に延ばし、俺の足元に転がる直前で、缶ビールをキャッチした。そして、ゆっくりと目の前に持っていくと、解析でもするようにピロピロと音を立てながら目を光らせた。

「イイモノ呑ンデマスネ」

もう一方の手にも缶が握られていたが、それは安物の発泡酒だった。

「オ仕事ハナニヲ？」

彼（？）は腕を伸ばして缶ビールを返してきた。俺は恐る恐るそれを受け取り、小さく頭を下げた。

「ただのサラリーマンです。おたくは？」

「タダノサラリーマンデス」

彼（？）は口角あたりのパーツを持ち上げた。

「ト言イタイトコロデスガ スーサイド・マシーン・ロビタンデス」

「ロビタン？」
　どこかで聞いたような名前だと眉をひそめ、ドクター・ナガマツの発明品だと聞いて口元を歪めた。
「例の自殺マシンか」
　俺が呟くと、ロビタンは首を傾げ、再び右腕を伸ばした。長く伸びた腕は目の前の街灯を掴んだ。力が込められた途端、街灯は目が眩むほど強く発光し、続いて、大きな音を立てて砕け散った。
「ドクターヲ アノ世ニ届ケルコト ソレガ私ノ使命」
　ロビタンは眉あたりのパーツをハの字にさせて、発泡酒を煽った。続いて、脳天から排気ガスを吐き出しながら頭をぐるりと一回転させた。
「燃料？」
「ハイ」
「効率悪そうだけど」
「体ニ良イモノバカリデハ ツマラナイデショ」
　破壊された街灯は、ジリジリと音を立てながら残りのフィラメントを焼き切った。辺りが一段と暗くなる。大抵のことには平常でいられる。ちょっとした職業病だろう。俺はビールを飲み干し、ロビタンに対抗するように空き缶を握りつぶした。
「すごいモンだ。しかし、なんで自殺補助具にコミュニケーション機能が必要なんだ？ そのドクターは変態か？」
「ドクターガ死ンダ後 ソレガ事故デナカッタト証明スル必要ガアリマス」
「変態だな」
　ロビタンは再び発泡酒を煽ると、脳天から排気ガスを吐き出しながら空き缶を灰にした。そして、首を一回転させてから俺を見た。眉あたりのパーツがつり上がっている。俺は身構えた。
「オ前ノ母チャン デベソ」
「な、何故それを。失敬だな、君」
「ヒトノ親ヲ変態呼バワリスルモンジャ ナイデスヨ」
「そうか。失敬した」
「ドクターハ 天才ナンデス」
　どこまでが本心で、どこまでがプログラムなのか。そもそも本心などというモノがあるのか。俺はいったい何と会話しているのか。わけが分からなくなってきた。
　一つ確認したいことがある。
「なんで俺の横に座った？ 広場にはいくつもベンチがあるだろう」
　ロビタンに心はあるのか。これで判断ができるような気がした。
「一人デ呑ンデモ ツマランデショ」
　俺は小さく頷き、そして、首を傾げた。
　そもそも、なんで俺は見ず知らずのロボットと肩を並べて酒を呑んでいるのか。これが生身の人間だったらどうだ。こんな気味の悪い話を聞かされて、とても一緒にいられない。
　俺は確かにサラリーマンだが、その業種はちょっと変わっている。

「以前、ナガマツ氏にあるロボットの処分を依頼されたことがある。俺は、殺し屋なんだ。」
　ロビタンは目のあたりのパーツを見開き、しばらくピコピコと音を立てた。
「マタマタ ゴ冗談ヲ」
　それは、とても正常な反応のように思われた。しかし、残念ながら冗談ではない。もし、ここでロビタンをスクラップすれば、俺には多額の報酬のうち一〇％がボーナスとして支給される。
「安心しな。そいつは範疇外の仕事だからお断りした」
　ロビタンはしばらく目を瞬かせながらピコピコと音を鳴らし続け、やがて、フリーズした。
「燃料切れか？」
　俺は立ち上がり、夜に浮かび上がるコンビニに目を向けた。焼酎ボトルでも売っているだろうか。少し強めの酒を用意したほうがよさそうだ。
「なぁ、もう一杯呑もうじゃないか」

太陽の横顔

　大阪モノレールで先方へ向かう途中、俺には楽しみにしていたことがあった。それは太陽の塔を見ることだ。各種メディアで何度もお目にかかっているが、自分の目で直に見るのは初めてのことだった。
「千里中央」駅から列車に揺られて行くと、その姿は向かって左側面から現れた。考えてみれば、俺がいつも見ていたのはどれも正面から映されたもので、その横顔を拝むことはなかった。樹々に囲まれた万博公園から突き出している奇妙なそれは、少し前屈みになって、細い首でパラボラアンテナのような金色の顔を支えていた。
「首、細いなぁ」
　思わず呟いた。初めて横顔を拝んだ率直な感想だ。
　楽しみにしていたとはいえ、事前にその姿を調査していたわけではない。太陽の塔は、未来を示す金色の顔を含め、現在、過去の三つの顔を持つが、そんなことも知らず、ぼんやりとした記憶のまま、「万博記念公園」駅に辿り着いた。その全貌が現れると、胴体には大きな現在の顔があり、不機嫌そうな表情で口を歪めている。俺を歓迎している様子はない。
「万博記念公園」駅で路線を乗り換える。俺は、しばらくプラットホームでその圧倒的に異様な姿を目に焼き付けながら列車を待った。

関東に暮らす俺にとって、この奇妙なオブジェが、どのような存在として近隣住民に受け入れられているのかは知らない。

関東圏でいうところの東京タワーのようなものだろうか。たまに小説や映画などに取り上げられて脚光を浴びるが、普段から何を思うわけでもない。それでも、電車やタクシーの中からその姿を見つければ、少し得したような気分になる。

もしくは、どの公園にもシンボルとなるものがあるが、その王様がこの太陽の塔であるようにも思える。幼い頃、よく遊んだ地元の公園には、いつも太極拳をしているおじさんと併せて、何人もの天使があしらわれた時計塔がシンボルだった。石造りの遊具が幾つも配置されており、全て肌色に近い薄ピンク色をしていたため、俺たちはここをピンク公園と呼んだ。

夜五時を過ぎると、ピンク公園の天使たちが遊び出す。

小学生の頃、そんな噂が立っていた。ピンク公園は学区外にある少し遠い遊び場だった。そのため、夕方以降の公園の様子を、誰も知らなかったのだ。

六年間なんて永遠と同じように思っていたが、気づけば小学校生活が終わり、中学校がはじまった。すると、ピンク公園は学区内となった。その上、そこを抜けていくことが中学校への近道だった。部活動などで遅くなれば、五時過ぎの公園が帰宅路になる。そして、天使が遊ぶことなどないと知った。それでも、日没の早い冬の夕方には、時計塔が気になって、足早に公園を駆け抜けたものだ。

幼少の頃から、キング・オブ・シンボルを見せられた子供たちはどのように育つのか。きっと様々な噂が囁かれるだろう。夜になれば、歩き出すのは当たり前、変身だってするし、空も飛ぶ。様々な姿をした太陽の塔が、子供たちの頭の中で活躍するのだ。

大人になって、たまの里帰りには、吸い寄せられるように万博公園へ足を運ぶ。そして、帰りが遅くなれば逃げるように駆け抜けた臆病な少年が蘇る。お腹の辺りがクゥと締め付けられて、再び駆け出したくなる衝動に襲われる。

天使たちが公園を飛び回る。太陽の塔が手招きする。あり得ないとことが起こる恐怖。身の危険。大抵の恐怖は死への連想だろう。大人になったって死ぬのは怖い。そのはずなのに、日常にかまけて見て見ぬ振りが上手になった。

仕事を終えて、夕焼けの「万博記念公園」駅に戻ってきた。今度は向かって右側面を拝みながら、駅へと滑り込んでゆく。やっぱり首は細い。列車を降りると、俺は迷わず改札を抜けた。公園の中央口に立って、その圧倒的な姿を見上げる。金色の顔が西日を跳ね返し、俺は目を細めた。

入場には多少の料金が掛かるようだった。この時間から、金を払って入園する気にはなれなかった。金がもったいないというより、限られた時間で、入園の手順を踏むことが億劫だった。この姿を呆然と眺めているだけで十分だ。

しばらく見上げていると、こちらに向かって一人の少年が駆けてきた。ちらりと太陽の塔を見上げては、少し加速する。俺は、不意に意地の悪いことを思いついた。そして、目の前をすり抜けようとする少年に声をかけた。

「この辺に鍵が落ちてなかったかな？」

少年は律儀にも立ち止まる。

「鍵ですか？　さぁ？」
　それはそうだろう。全速力で走ってきた少年に尋ねることではない。
「困った、困った」
　少年は、「はあ」と気のない返事をした。
「あれに乗って、バルタン星に帰らなきゃならんのだ」
　俺はそう言って、クラーク先生さながら、真っ直ぐに太陽の塔を指さした。
　少年は口元を歪め、小さく頭を垂れる。そして、俺に背を向けて再び駆け出して行った。
　俺は少年の中で、太極拳おじさん程度の記憶として刻まれたろうか。そして、少年は大人になった時、夕日を浴びた太陽の塔を見上げながら思い出す。あのおじさんは何だったんだろう。
　フォッフォッフォ。
　不気味に笑っておいてもよかったな。

奥付

奥付

Puzzzle 文集 1

https://puboo.jp/book/31029

著者：puzzzle
著者プロフィール：https://puboo.jp/users/puzzzle/profile

感想はこちらのコメントへ
https://puboo.jp/book/31029

ブクログのパブー本棚へ入れる
http://booklog.jp/puboo/book/31029

電子書籍プラットフォーム：ブクログのパブー（https://puboo.jp/）
運営会社：株式会社 paperboy&co.

Puzzzle文集 1

著　　puzzzle

制　作　Puboo
発行所　デザインエッグ株式会社